２０２０年度　事業の概要

1 調査と研究 …… 32
飛鳥藤原京の発掘調査 …… 32
平城宮・京の発掘調査 …… 32
企画調整部の研究活動 …… 33
文化遺産部の研究活動 …… 34
●歴史研究室の調査と研究 …… 34
●建造物研究室の調査と研究 …… 35
●景観研究室の調査と研究 …… 35
●遺跡整備研究室の調査と研究 …… 36
埋蔵文化財センターの研究活動 …… 36
●保存修復科学研究室の調査と研究 …… 36
●環境考古学研究室の調査と研究 …… 37
●年代学研究室の調査と研究 …… 37
●遺跡・調査技術研究室の調査と研究 …… 38
国際学術交流 …… 38
●中国社会科学院考古研究所との共同研究 …… 38
●中国河南省文物考古研究院との共同研究 …… 38
●中国遼寧省文物考古研究院との共同研究 …… 39
●大韓民国国立文化財研究所との共同研究 …… 39
●アジア諸国等における文化財修復保存協力事業 …… 39
●カンボジアにおける共同研究 …… 39
●英国セインズベリー日本藝術研究所等との共同研究 …… 40
●カザフスタン共和国国立博物館との技術移転・人材育成事業 …… 40
●台湾中央研究院歴史語言研究所との研究交流 …… 40
公開講演会 …… 41
第12回東京講演会 …… 41
研究集会 …… 41
科学研究費等 …… 42
学会・研究会等の活動 …… 50
国が実施する事業等についての調査・協力 …… 51
●平城宮・京跡の整備と情報発信 …… 51
●高松塚古墳壁画の保存のための調査研究 …… 51
●キトラ古墳に関する調査研究 …… 52
現地説明会 …… 52

2 研修・指導と教育 …… 53
文化財担当者研修と指導 …… 53
京都大学（大学院）との連携教育 …… 54
奈良女子大学（大学院）との連携協力 …… 54
奈良大学への教育協力 …… 54

3 展示と公開 …… 55
飛鳥資料館の展示 …… 55
平城宮跡資料館の展示 …… 55
解説ボランティア事業 …… 56
図書資料・データベースの公開 …… 56

4 その他 …… 57
刊行物 …… 57
予算等 …… 63
客員研究員一覧 …… 64

1 調査と研究

飛鳥藤原京の発掘調査

都城発掘調査部が飛鳥・藤原地区において2020年度に実施した発掘調査は、藤原宮跡で２件、藤原京跡で２件、飛鳥地域で２件である。また、立会調査は３件である。以下、主要な調査成果について概要を記す。

藤原宮大極殿院の調査（第205次）は、第200次調査において東面回廊に取り付く大極殿後方東回廊が発見されたことを受け、大極殿院東面回廊のうち大極殿後方東回廊より北方の規模と構造の解明、ならびに大極殿院内庭における建物の有無等の確認を目的として実施した。調査面積は1,505㎡、調査期間は４月６日から12月11日までである。なお、４月27日から５月24日までは新型インフルエンザ等対策特別措置法にもとづく「緊急事態宣言」のため、発掘調査を一時中断した。

東面北回廊については桁行７間分の礎石据付痕跡を検出し、大極殿後方東回廊と北面回廊の間は桁行総長47.1m、12間であることがあきらかになった。当該部分の桁行寸法は3.8～4.0mであり、大極殿後方東回廊より南方の東面回廊が約4.1mを基本としているのと異なる。このことから、大極殿後方回廊の北と南で計画や造営の過程が異なっていた可能性がある。また、今回の調査で大極殿院回廊東半のほぼ全域の調査を終えた。東面回廊はほぼ中央に桁行７間、梁行２間の東門が開き、門の南方が桁行17間、門の北方が桁行19間（北面回廊・南面回廊の接続部を含む）であることがあきらかになった。

大極殿院内庭については、第200次調査で大極殿院後方東回廊の発見により、藤原宮大極殿院と前期難波宮内裏前殿区画の構造の類似性が指摘されたことから、藤原宮大極殿院内庭東北部に前期難波宮内裏後殿の東脇殿に相当する建物が存在する可能性が生じた。しかし、調査の結果、明確な建物の痕跡は確認できなかった。

また、藤原宮跡では、ほかにも東方官衙南地区（第204-1次）の調査をおこない、藤原宮期の遺構は確認できなかったものの、藤原宮期の可能性のある整地土や近世以前の土坑や落ち込みを確認した。

藤原京跡では、藤原京右京六条二・三坊、四分遺跡（第204-2次）、藤原京左京三坊（第204-6次）の調査をおこなった。

藤原京右京六条二・三坊（第204-2次）は南北溝２条、弥生時代の土坑１基を検出した。調査地は西二坊大路の想定位置にあたる。しかし、２条の南北溝のうち、西側の溝は第167次調査で検出した平安時代の溝に相当すると考えられる。東側の溝は西二坊大路東側溝を踏襲する可能性はあるものの、少なくとも中世までは機能していたと考えられるため、西二坊大路両側溝と断定できる遺構は確認できなかった。

藤原京左京三条三坊（第204-6次）では、東三坊坊間路の両側溝を検出した。加えて、条坊側溝が埋没する過程で投棄された土器や炭化物を含む包含層を検出している。また藤原宮以前の遺構として、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての土坑や沼状遺構が展開していることを確認した。

飛鳥地域では、奥山廃寺（第204-7次）、大官大寺南方（第206次）の調査をおこなった。

奥山廃寺（第204-7次）の調査地は、奥山廃寺金堂から約50m北に位置する。寺院に関わる建物は検出できなかったが、古代の大規模な整地層を確認した。整地層は寺院造営に関わる可能性が高いと考えられる。また、古墳時代の溝を確認し、調査地一帯の奥山廃寺造営前の当該地の土地利用の一端を知ることができた。

大官大寺南方（第206次）の調査地は、藤原京左京十一条四坊に位置する。飛鳥・藤原地区では、大官大寺から山田道までの地域の土地利用状況をあきらかにするため、2018年度から地中レーダー探査と試掘調査を継続しておこなっており、今回が４回目の調査となる。本調査では、７世期後半から末までの総柱建物１棟、南北棟建物１棟、南北塀２条、井戸を検出した。今回の調査地は東四坊坊間路の想定位置にあたるが、その東西側溝に相当する遺構は確認できなかった。また、調査区西端では古墳時代の可能性がある土坑を２基検出した。

平城宮・京の発掘調査

都城発掘調査部が平城地区において2020年度に実施した発掘調査は、平城宮跡で３件、平城京跡14件である。以下、主要な調査成果について概要を紹介する。

平城宮跡では、東方官衙地区（第621次）、第一次大極殿院東楼（第630次）、東院地区（第633次）の調査をおこなった。このうち、東方官衙地区の調査（第621次）は、2019年度に大型基壇建物を検出した第615次調査区の西側に一部重複させて調査区を設けた。検出遺構は南北築地塀１条、東西築地塀１条、基幹排水路１条、素掘溝１条、木樋暗渠１条、石組暗渠１条、木樋２基、瓦樋１基、掘立柱東西棟建物１棟、掘立柱南北塀３条等である。

調査の結果、大型基壇建物が位置する区画の西面と

北面を画する築地塀を検出するとともに、当該区画周辺における排水施設の整備状況があきらかになった。大型基壇建物が建つ区画の西側を南流する基幹排水路は、幅６～７m、深さ1.5～1.6mで、奈良時代前半から平安時代初頭ごろまで維持されていた。基幹排水路の東岸上では南北築地塀が並行して築かれており、それをくぐる石組暗渠と木樋暗渠は、大型基壇建物が建つ区画から基幹排水路への排水を担う施設と考えられる。石組暗渠は大型の石材を用いた構造で平城宮でも類例の少ない重厚なつくりである。また、基幹排水路の西岸部でも、木樋や瓦樋を繰り返し設けていることを確認した。ただし、西岸部の施設は東岸部に比べ簡素な構造であり、重要施設である大型基壇建物が位置する東岸に手厚い排水施設を設けていることが判明した。大型基壇建物を有する区画の重要性を改めて示す成果といえる。なお、基幹排水路の埋土からは多くの木簡や土器・瓦等の遺物が出土している。東方官衙地区の実態を知るうえで重要な基礎資料であり、今後、整理作業および調査研究を進めていく予定である。

第630次では、第一次大極殿院東楼の復原整備に伴い遺構面の確認をおこなった。東院地区の第633次調査は2017年度に実施した第595次調査区に一部重複させてその東側に調査区を設定し、2021年度にかけて調査を実施する。

平城京域では薬師寺東塔（第622・623次）、西大寺旧境内（第624・627次）、興福寺境内（第625・628次）、東大寺境内（第626次）、右京三条一坊八坪（第629次）、法華寺旧境内（第631次）、法華寺庭園（第632次）、左京一条二坊十五坪（第634次）、左京三条一坊十五坪（第635次）、左京二条二坊五坪（第636次）、平城宮北方遺跡（第637次）の調査を実施した。

薬師寺では東塔周辺整備にともなう発掘調査を２件実施した。このうち、東塔基壇北面と南面の調査（第622次）では創建期の階段地覆石抜取溝、犬走り、雨落溝抜取痕跡等を検出するとともに、後世におこなわれた基壇周辺の改修状況を確認した。

西大寺旧境内の調査のうち小塔院東辺の推定位置でおこなった調査（第624次）では、小塔院東辺区画施設の西雨落溝を踏襲したとみられる位置に、中世の素掘溝を検出した。

興福寺境内の調査（第625次）は興福寺の境内整備事業にともなうものである。2020年度は鐘楼地区と東金堂院地区を対象とし、鐘楼基壇全体と五重塔の西に開く門、南面築地塀想定位置の３カ所に調査区を設けた。鐘楼地区では、鐘楼の規模と構造が判明するとともに、創建の鐘楼が袴腰付きであった可能性が高まり、現存事例では平安時代末が最古であった袴腰付き鐘楼が、奈良時代に遡る可能性を指摘した。また、基壇周囲ではたび重なる罹災の履歴を裏づける成果があがった。東金堂院地区では五重塔正面の門の規模と構造に重要な知見が得られるとともに、南面築地塀想定位置でも回廊礎石据付穴や石組溝等を検出し、東金堂院および南面築地塀の構造解明に重要な手がかりが得られた。

東大寺東塔院跡整備事業のうち園路敷設にともなう調査（第626次）では、中世の石列や瓦廃棄土坑、12～13世紀の土器を含む整地土を確認した。

法華寺庭園の調査（第632次）は、名勝法華寺庭園の整備事業に伴い、庭園の構造解明を目的として池北側で実施した。築山に設えられた景石の遺存状態、池護岸の変遷等について重要な知見を得た。また、護岸改修にともなう立会調査では奈良時代に遡る可能性のある柱穴を検出している。

平城宮跡の隣接地で実施した調査のうち、コナベ古墳南方における左京一条二坊十五坪の調査（第634次）では、３時期に区分される奈良時代前半の遺構群を検出した。素掘溝による方形区画遺構と、和同開珎緡銭の埋納遺構を検出したことが特筆される。左京三条一坊十五坪の調査（第635次）では、西側でおこなった第534次調査の大型掘立柱建物に関連するとみられる奈良時代の掘立柱建物・塀や井戸を、左京二条二坊五坪の調査（第636次）では掘立柱塀と素掘溝からなる区画施設を、平城宮北方遺跡の調査（第637次）では推定大蔵省の東を限るとみられる築地塀を検出した。

企画調整部の研究活動

企画調整部は、地方公共団体の文化財担当者に対する専門的な研修、研究所の調査研究成果や文化財に関する情報の発信、文化財情報の収集・発信システムの研究と情報内容の充実、国際的な文化財の調査や保護に関する協力・支援と学術交流・研修、飛鳥資料館・平城宮跡資料館等における研究成果の展示公開と普及活動といった事業を実施している。また、奈良文化財研究所がおこなう様々な事業について、全体的・総合的な企画としての調整、そして、事業成果の内外への情報発信や活用を担当している。

2020年度については、当部の活動も新型コロナウイルス感染症の感染拡大の影響を大きく受けた。

企画調整室が管轄する文化財担当者専門研修は、当初15課程を予定していた。しかし、新型コロナウイルス感染症の感染拡大を受け、１課程の定員を10名

に限定するとともに、感染予防策を徹底して実施したが、感染者数が比較的少なかった９月から10月間の専門研修４課程のみ開催することができた。実地踏査や実技・実習を取り入れた研修が好評であり、今後、リモート研修を検討する際の課題となった。研修総日数21日、研修生総数32名であった。

文化財情報研究室では、文化財情報電子化の研究と研究所事業の多言語化を進めている。文化財情報電子化の研究では、発掘調査報告書に関するデータベースである全国遺跡報告総覧を研究所ホームページにて公開しており、国の内外より極めて多くのアクセスを得ている。遺跡情報・遺構情報・遺物情報の収集管理や活用に関する情報収集は継続的に実施しており、各種データベースへのデータ入力・更新を日常的におこなっている。2020年度には、文化財を紹介する動画をまとめた文化財動画ライブラリーを構築した。また、研究所事業の多言語化では、文化庁の補助金（文化財多言語解説整備事業）等も得て、平城宮跡資料館の展示の多言語化を重点に進めた。

国際遺跡研究室が主管する文化財保護に資する国際協力には、①1993年から継続しておこなっているカンボジアとの共同研究事業、②文化庁受託事業である文化遺産国際協力拠点交流事業、③セインズベリー日本藝術研究所（英国）との研究交流、④ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）が実施する研修への協力事業がある。①では、王都アンコール・トム内の西トップ遺跡にて、現地文化財保護機関の国立アプサラ機構（アンコール・シェムリアップ地域保存整備機構）と共同で調査および修復を進めている。②では、カザフスタン共和国国立博物館を相手国拠点として、考古遺物の調査・記録・保存を目的とした交流事業「カザフスタンにおける考古遺物の調査・記録・保存に関する技術移転を目的とした拠点交流事業」を推進している。③では、日本考古学の国際的研究の推進事業を共同で実施することを目的に、日本の文化財に関するオンライン・リソースの共同開発や、日本考古学の英文解説書の刊行、同研究所が企画中の特別展 Arrival of Belief への協力等をおこなっている。④では、ACCU主催の研修事業や国際研究集会への研究者の派遣や運営協力をおこなっている。なお、このほかの国際共同研究としては、都城発掘調査部が中心となっておこなっている中国社会科学院考古研究所、河南省文物考古研究院、遼寧省文物考古研究院（以上、中国）との共同研究、国立文化財研究所（韓国）との共同研究、中央研究院歴史語言研究所（台湾）との研究交流等がある。

展示企画室では、４月１日から５月31日まで臨時休館し、６月２日に再開した平城宮跡資料館にて、ミニ展示「古代のいのり ―疫病退散！」、夏期企画展「奈良の都の考古学 ―発掘された平城2019」、秋期特別展「地下の正倉院展 ―重要文化財 長屋王家木簡―」、新春ミニ展示「平城京の丑」を実施した。また、2021年１月23日から３月28日まで平城宮いざない館にて都城発掘調査部と協力して、平城宮跡歴史公園第一次大極殿院南門復原整備工事記念特別展「鬼神乱舞 ―護る・祓う・鬼瓦の世界―」を開催した。このほか、文化財情報研究室等と協力し、平城宮跡資料館の展示の多言語化を進めるとともに、展示物に対して地震対策を施した。

写真室では、研究所内の各文化財記録写真の撮影、写真データの保存管理をおこなっている。また、写真記録の高精度・効率化を目的に様々な撮影手法の開発もおこなっている。近年では、平城宮跡内で進行する第一次大極殿院南門の復原工事の記録写真の撮影を定期的におこなっている。このほか、研修動画を作成、ACCU主催の海外の文化財担当者を対象とした研修事業の講師をリモートで務めた。

文化遺産部の研究活動

文化遺産部は、歴史研究室、建造物研究室、景観研究室、遺跡整備研究室をおき、それぞれが、「書跡資料・歴史資料」、「歴史的建造物・伝統的建造物群」、「文化的景観」、「遺跡・庭園」について、専門的かつ総合的な調査研究をおこなっている。各研究室における調査研究の成果は、文化財の指定・登録・選定やその後の保存と活用に関する方策等、国の文化財保護行政にも大きく資するものとなっている。

●歴史研究室の調査と研究

歴史研究室では、日本を代表し、世界文化遺産に登録されるような古寺社が所蔵する書跡資料・歴史資料について、奈良を中心として、継続的な調査研究をおこなっている。また、古都の旧家等に伝来した歴史資料についても調査研究をしている。

2020年度は、仁和寺・唐招提寺・興福寺・薬師寺・当麻寺・法華寺や、奈良関係の旧家等が所蔵する歴史資料・書跡資料調査をおこなった。

仁和寺の調査では、御経蔵聖教第94函～第102函の調書原本校正・写真撮影を実施した。また、御経蔵第77函～第89函の聖教について、書誌事項を検討し、『仁和寺史料　目録編〔稿〕４』として刊行した。

唐招提寺の調査においては、聖教第17函～第19函の調書作成や、聖教第８函～第９函の写真撮影をおこなった。

興福寺の調査をおこない、井坊家記録の調書作成・二条家記録の写真撮影等を実施した。また二条家記録第７函279号「文亀三年引付」について、その内容を『奈文研論叢２』に公表した。

薬師寺においては、未整理の新出資料を調査し、新出絵図筥の写真撮影をおこなった。

当麻寺が所蔵する未整理の経典を調査し、固着した経典の開被作業をおこなった。また東22函～29函の調書を作成した。

法華寺所蔵の未整理の歴史資料を調査し、その全貌把握に努めた。また第７函の調書作成をおこなった。

さらには、金峯山寺関係の個人蔵の歴史資料について調査を実施し、第３函～第６函の調書作成・写真撮影をおこなった。

氷室神社宮司の大宮家所蔵文書につき、奈良市教育委員会と連携研究「大宮家文書の共同研究」の協定を結び、函文書の調書作成を進めた。

また、興福寺関係の個人所蔵資料について、科学研究費補助金も充当して調査・写真撮影を実施した。その結果、当該資料は当研究所に寄贈された。

当研究所所蔵の覚城院・萩原寺等関係中世聖教類について調査をおこない、その釈文・性格等を『奈文研論叢２』に公表した。

その他、調査協力の依頼を受けて、文化庁による仁和寺聖教調査等に協力した。

●建造物研究室の調査と研究

建造物研究室では、歴史的建造物、伝統的建造物群に関する調査研究をおこなうことにより、わが国の文化財建造物の保存・修復、活用に資する基礎データの蓄積を継続的におこなっている。また、古代建築の保存と復原に資するため、古代建築の構造・技法の調査研究を、現存建物のほか、修理等の際に保存された古材、発掘遺構・遺物等を研究対象として進めている。以下2020年度におこなった調査研究内容を紹介する。

基礎的な調査研究として、奈良県内の社寺建築の悉皆調査をおこない、また斑鳩町所在の斑鳩神社・菅神社について、近世初頭の建築として詳細調査をおこなった。

受託研究業務としては、島根県松江市から松江神社建造物調査業務を受託した。松江神社の社殿はかつての松江東照宮の社殿を移築したもので、その変遷を明確にし、同時期に建築された類例の調査をおこない、社殿の価値をあきらかにした。また、境内全体についても、現況および変遷について調査をおこなった。なお、2021年３月に調査成果を纏めた報告書を作成し、松江市より刊行された。

和歌山県高野町からは、昨年度受託した町内歴史的建造物の悉皆調査に引き続き、高野山地区建造物調査業務を受託した。高野山金剛峯寺所管の近世期の建築のうち、年代が古い物件および19世紀の伽藍復興にかかる物件について詳細な調査をおこなった。

徳島県藍住町からは、犬伏家住宅の保存活用計画策定業務を受託した。部材等の詳細な保存・改造状況、修理の必要性等を調査し、調査成果にもとづき、保存活用計画案を作成した。今後は、具体的な活用方法が決まった段階で、計画の調整に協力する。

また、2019年度に、徳島県から受託した「あわの至宝」調査・発信業務および、高山市から受託した高山市料亭州さき建造物調査業務の調査成果について、それぞれ報告書の執筆編集をおこない、各自治体から報告書が刊行された。

このほか、各地で実施されている文化財建造物の保存、史跡整備事業等について指導・助言をおこなっている。

●景観研究室の調査と研究

景観研究室では、文化的景観を主な対象として、その概念および保存・活用のための基礎的・応用的な調査研究に取り組んでいる。また、文化的景観保護に係る基礎的情報の収集・整理・検討・公開を進めつつ、文化的景観の具体的事例に関する取り組みとして、地方公共団体からの受託研究等を通じて、保護措置の諸問題について検討を重ねている。

2020年度は、文化的景観研究会を３月５日にオンラインで開催した。近年重要文化的景観に選定（または答申）された「越前海岸の水仙畑」（福井県福井市）、「宇和海狩浜の段畑と農漁村景観」（愛媛県西予市）等における調査や保存活用の状況について、地方公共団体の文化財保護担当者や研究者から情報収集をおこない、課題を整理した。

その他、以前から当研究所ウェブサイトにおいて公開している日本全国の重要文化的景観選定地区の概要について、最新情報を追加した。

地方公共団体からの受託研究については、前年度に引き続いて鳥取県智頭町から重要文化的景観「智頭の林業景観」の整備計画策定に向けた調査を受託し、智頭宿、芦津、東山・沖ノ山地区において、文化的景観の現地調査・住民説明等をおこない、成果をとりまと

めた。また、京都市から文化的景観推進事業にかかる調査業務を受託し、文化的景観の周知のための概要の作成、取り組み経過等の整理をおこなった。

●遺跡整備研究室の調査と研究

遺跡整備研究室では、遺跡等の整備・活用と庭園について調査研究をおこなっている。

遺跡等の整備・活用については国際的な動向も視野に入れながら、主として国内に所在する遺跡等の保存・活用およびそのための整備事業について、理念や計画、設計、技術に関する調査研究をおこなっている。

2020年度は、10月16日に「歴史的脈絡に因む遺跡の活用―儀式・行事の再現と地域間交流の再構築―」をテーマとして遺跡整備・活用研究集会をおこなったが、新型コロナウイルス感染症拡大防止の措置として発表者およびコメンテーター等の12名による小規模開催とした。年度末には同名の報告書を刊行した。研究集会での報告のほか、各地の史跡等での活用事例を紹介している。遺跡等で再現される儀式・行事は、来訪者に視覚的な印象を強く与えることから、史実・復元できる部分、推測した部分、脚色した部分について来訪者に明確に伝える必要があることが確認された。また、歴食と呼ぶ過去の食膳の再現においても同様で、どのような過程で再現したのかについて記録し、説明を付した上で、観光素材としての商品開発等を進めることが大切である。さらに、出土遺物に因み、生産地と消費地という遺跡どうしの関係性に着目し、現在の地域間交流につなげた事例も紹介された。

平城宮跡の活用に関する実践的研究として、2020年度から6カ年に渡り、Ⅰ．復元建物のある空間における歴史的文脈にもとづく体験の提供、Ⅱ．遺跡現地と遺物・情報の関係性の再構築、Ⅲ．遺跡のある地域との関係性の再構築の3つのテーマにもとづき、遺跡現地の活用を促進する取り組みをおこなっている。2020年度は、兵庫県養父市立八鹿小学校の赤米献上隊の受け入れについて推定宮内省地区にて贈呈式をおこなったほか、「AR宝幢・四神旗」の改良と多言語化、平城宮跡管理センターとの共催による木簡体験プログラムの試行実施、古代の盤上遊戯「かりうち」の道具等試作とテストプレイをおこなった。

古墳壁画の保存活用については、特別史跡キトラ古墳の墳丘近くに壁画の残存状況を示す乾拓板が設置されており、その活用と遺跡見学の試みを毎年国営飛鳥歴史公園と共催でおこなってきたが、感染拡大防止の観点から中止した。高松塚古墳の壁画についても乾拓板を作成し全面が揃い、今後活用を図る。

庭園の調査研究については、2016年度から継続してきた「庭園の歴史に関する研究（近世庭園）」の最終年度としてその成果をとりまとめるため、研究論集の編集をおこなった。また、奈良市教育委員会との連携研究「奈良市における庭園の悉皆的調査」では、報告書の編集作業を進めた。さらに、森蘊旧蔵資料・村岡正旧蔵資料について地方公共団体等における庭園の整備に資するため、整理およびデジタル化を進めた。そして、次年度予定しているそれらの展示について企画・準備をおこなった。

埋蔵文化財センターの研究活動

埋蔵文化財センターは、遺跡・調査技術研究室、環境考古学研究室、年代学研究室および保存修復科学研究室の4室から組織されている。当センターは、文化財の調査、研究および保存に関する先進的な研究に取り組むとともに、これらの研究成果を、文化財担当者研修やワークショップにより広く普及を図っている。また、国や地方公共団体の要請にもとづき文化財保護に関する専門的な助言や協力をおこなっている。2020年度の各研究室の活動内容は以下のとおりである。

●保存修復科学研究室の調査と研究

文化財に関する基礎的・体系的な調査・研究および調査手法の研究・開発を推進するため、1）考古遺物の保存処理法に関する調査研究、2）遺構の安定した保存のための維持管理方法に関する調査研究、3）建造物の彩色に関する調査研究、4）古墳壁画の恒久的保存に関する調査研究を実施してきた。

1）では保存処理法の開発に関する研究として、①鉄製遺物を対象とした新規脱塩法の開発に関する研究、②鉄製遺物の安全な保管・管理システムの構築を目的とした、鉄製遺物の埋蔵環境がそれらの劣化特性におよぼす影響に関する基礎的検討、③木製遺物の保存処理における効率的な薬剤含浸法の開発に関する基礎研究を実施した。さらに、種々の材料調査分析法を総合的に活用して出土遺物の材質・構造に関する診断調査を実施するものとして、④蛍光X線分析法等の分析手法を応用したガラス玉等の材質構造調査、⑤迅速な元素マッピング機能を有する蛍光X線分析システムの考古遺物への応用を検討するとともに、⑥考古遺物を対象とした分析方法の標準化に取り組んだ。また、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の影響で2019年度に開催できなかった「遺跡保存に関する最

近の動向」をテーマとした研究集会をWeb配信の形式をとり、３月22～28日の日程で実施した。

２）では①石造文化財に多用される砂岩を対象として、石材の破壊特性に関する諸物性値に対して水分状態がおよぼす影響を検討するとともに、石材の乾湿繰り返し劣化のモデル化を目的として、水分飽和度に対するそれらの物性値の関数化を試みた。また、②土壌カラム実験による埋蔵環境のモデル化、および埋蔵環境下における金属製遺物腐食のモデル化に関する研究を実施した。フィールド調査としては、③塩類が析出することでハニワ片の劣化が進行している高槻市ハニワ工場公園で環境調査と塩析出に対する遺構展示館内の照明設備や換気の影響、およびそれらを抑制する運用方法について検討した。さらに、④高松市所在の石船塚古墳、三谷古墳、石船天満宮で保存されている劣化状態が異なる同質の石材石棺を対象として、周辺環境と劣化状態の比較調査を継続して実施した。

３）では①平城宮跡復原大極殿において引き続き外界気象の実測調査と塗装の劣化状態調査をおこない、周辺環境が塗装の劣化におよぼす影響について検討した。また、②モンゴル国で16世紀の遺跡と推定されている寺院遺跡から出土した壁画片の顔料の材質分析を実施した。

４）では①日田市ガランドヤ古墳群のうち１号墳、法恩寺山３号墳、穴観音古墳の装飾古墳において環境調査を継続するとともに、新たに仮設保護施設が設置されたガランドヤ２号墳施設内部の温熱環境調査を実施した。②模擬古墳を用いた研究では、古墳石室内での金属製遺物の腐食挙動に関する検討を継続するとともに、③宮崎市蓮ヶ池横穴群において、横穴が穿たれた岩盤表層の劣化状態調査および温熱環境調査をおこない、横穴の保存と活用を可能とする保存環境の制御方法について検討した。また、④漆喰の平衡含水率測定や細孔径分布計測から水分移動特性の検討をおこない、古墳壁画の適切な保存環境について検討した。

受託事業として、松帆銅鐸・舌の調査研究（南あわじ市）を実施した。また、連携研究として、国史跡石清尾山古墳石棺および同質石材石棺の乾湿風化に対して周辺環境がおよぼす影響の検討（高松市）、文化財の保存および活用に資する分析研究（日鉄テクノロジー株式会社）、一乗谷朝倉氏遺跡の保存・活用のための保存技術の確立（福井県）等を実施した。国宝高松塚古墳壁画恒久保存対策に関する研究等業務（文化庁）ならびに特別史跡キトラ古墳保存・活用等調査業務（文化庁）および文化庁キトラ古墳壁画保存管理施設（キトラ古墳壁画体験館四神の館内）の管理・運営業務（文化庁）において、修理のための材料調査、高松塚古墳石室石材の安定化対策と新施設への輸送を想定した石材輸送時の負荷計測、四神の館における壁画保存環境の管理をおこなった。

●環境考古学研究室の調査と研究

環境考古学研究室では、動物考古学を中心とした環境考古学の調査研究を実施し、国内外の発掘調査や整理、報告書作成の協力および助言をおこなっている。

今年度の発掘調査や整理、報告書作成として、中沢浜貝塚（岩手県）、波怒棄館遺跡（宮城県）、前田耕地遺跡（東京都）、金井下新田遺跡（群馬県）、保美貝塚（愛知県）、公家町遺跡・相国寺旧境内（京都府）、西大寺食堂院（奈良県）等の遺跡から出土した動物遺存体を分析した。東京都の前田耕地遺跡から出土した動物遺存体は縄文時代草創期の生業研究に大きな影響を与えてきたが、魚類の歯以外は分析対象となっておらず、その他の骨については同定結果が正式に報告されないままで評価されてきた。そこで、東京都教育委員会が所蔵する前田耕地遺跡から出土した動物遺存体の同定・記載をあらためて実施し、サケ科魚類の集中的な漁獲とともに、クマ属やシカ科等を対象とした狩猟もおこなっていたことをあきらかにした。

また、奈良県内の遺跡からみつかった花粉を集成して植生の歴史的変遷を考察するとともに、周辺地域との比較をおこない、植生変化の地域的な違いを検討した。これらの成果を「花粉分析からみた都城造営と植生変化」と題して『埋蔵文化財ニュース』184に掲載した。

研究成果の発信や社会還元として、「古代食の総合的復元と疾病の関係解明」シンポジウム、東京都埋蔵文化財センター文化財講演会、近江貝塚研究会等で研究発表や講演会を行った。ほかにも、遺跡でみつかる動物の足跡を調査するためのレプリカ標本を作製した。

●年代学研究室の調査と研究

年代学研究室では、考古学、建築史学、美術史学、歴史学等の文化財に関わる諸分野の研究に資するべく、出土遺物、建造物、美術工芸品等、多岐にわたる木造文化財の年輪年代調査を実施している。また、標準年輪曲線の拡充による木造文化財の産地推定や、年輪年代学的手法による同一材の推定、マイクロフォーカスX線CTを用いた非破壊調査手法の活用等、年輪年代学に関する基礎研究や、年輪年代学を応用した文化財の科学的分析手法の研究開発をおこなっている。

出土遺物の調査・研究では、長岡京跡右京六条三坊三町の南西部において検出された長岡京期と考えられている大型掘立柱建物から出土した礎板および加工木材について、年輪年代調査をおこなった。この建物は、南北７間、東西２間の母屋に西面庇が付属する長岡京でも最大級の建物である。調査対象とした木質遺物のうち、もっとも新しい年輪年代があきらかになったのは、唯一辺材が残存する礎板で、最外層の年代が778年であり、一連の木質遺物が778年以降それほど経たない年代に伐採されたと考えられる。

また、美術院所蔵の金剛力士立像や、甲斐善光寺所蔵の源頼朝坐像といった木彫像の解体修理に合わせた年輪年代調査や、奈文研がおこなう建造物調査や古文書調査に合わせた年輪年代調査を実施している。

この他に、近年実施している年輪年代学的手法による同一材由来の推定に関して、平城宮第一次大極殿院西楼から出土した木簡群に対して年輪年代学的手法を適用した検討をおこない、同一材と考えられる削屑を多数見出すことができた。現在、同一遺構出土の削屑200 点余りを検討中であり、さらなる成果があがることが期待される。

このように、年輪年代学に関する調査・研究を通して、各種文化財に資する様々な情報を提供することができた。従来、主に年代測定の手段として使用されることの多かった年輪年代学を、同一材推定の視点から木簡へ応用を継続的に進めている点も、今年度の大きな特徴である。今後、古代史学への貢献が期待される等、年輪年代学による調査・研究が発展的に進展するものと考えられる。

●遺跡・調査技術研究室の調査と研究

2020年度は、以下の点の研究を進めた。

遺跡研究としては、従来より継続している古代の官衙・寺院の情報収集を継続している。これらの作業により得られた情報を整理しており、現在システムの更新の必要等により公開を一時停止し、変更を予定している遺跡データベースの基礎情報に追加をおこなう予定にしている。加えて、遺物としては皇朝十二銭と銙帯金具について情報収集をおこなっている。これらの成果の公開を含め、古代官衙・集落研究集会をオンラインにて開催した。

また、考古資料および史料からみた過去の地震・火災災害に関する情報の収集とデータベースの構築・改良をおこなった。発掘調査データによる災害痕跡の抽出を進め、現在おこなわれている発掘調査現場における災害痕跡の認定、調査、資料最終、分析、報告等により防災・減災に寄与する遺跡からの情報収集を進めている。

三次元計測手法については、遺跡周辺環境の評価から考古資料の局部における微細な痕跡に至る多様なスケール情報の取得手法を検討し、特に調査時に課題となる遺構および遺物の計測について実用化を主眼に検討をおこない、適切な情報の効率的な取得手法を検討した。また、自治体等の依頼により三次元計測のワークショップを実施し、低コストで運用が可能な手法をその有効性と限界を示しつつ普及を進めている。

また、廉価型GPS機器の遺跡調査への応用を進め、高精度での位置決定が可能なRTK-GPSの試験と探査機器との連携によるデータ取得の効率化を進めた。

多チャンネルGPRについては、既存のアンテナの中心周波数より高い機材を導入し、浅い部分のデータ取得の高密度化、迅速化を進めた。条件の良好な調査地においては、初期の試験では従来の1/20程度まで短縮することが可能になり、今後、条件の良好でない場所においても安定して走査が可能な方法を改良していきたい。

国際学術交流

奈良文化財研究所では、以下に紹介する通り、中国・韓国・カンボジア・英国・カザフスタン・台湾等に所在する諸機関と協約・協定等を締結し、学術共同研究や各種の交流・協力事業を展開している。2020年度は新型コロナウイルスの感染拡大を受けて、専門家の渡航をともなう国際学術交流が困難になったが、オンラインツールの積極的な活用によって対応をはかった。

文化庁の委託事業である文化遺産国際協力拠点交流事業は、カザフスタン共和国国立博物館を相手先機関として２年目を終了し、2021年度も継続中である。

●中国社会科学院考古研究所との共同研究

中国社会科学院考古研究所との共同研究は、北魏洛陽城出土遺物の整理研究および両研究所間の学術交流である。しかし、新型コロナウイルスの流行により両国間の往来はできず、すべての計画を来年度に延期することとした。2020年度は、過去に実施した北魏洛陽城出土遺物についての調書および実測図、写真等の整理をおこなった。

●中国河南省文物考古研究院との共同研究

奈良文化財研究所と河南省文物考古研究院は、2015

年３月19日締結の「友好共同研究議定書」第４条と「友好共同研究覚書」の関連規定にもとづき、鞏義市黄冶・白河唐三彩窯跡の考古学的研究を実施してきた。2019年度中に「友好共同研究議定書」と「友好共同研究覚書」の改定予定であったが、新型コロナウイルス感染症の影響で、2020年２月以降、渡航が困難となり、改定ができていない。

2020年度は、これまでの共同研究の成果を踏まえ、『鞏義黄冶窯発掘調査報告』本文編・図版編（奈文研学報第99冊）を刊行した。

また、河南省文物考古研究院からの招聘を受け、2020年９月に河南省鄭州市で開催予定であった「唐三彩・奈良三彩学術シンポジウム」（中国古陶瓷学会主催）の発表準備を進めてきたが、新型コロナウイルス感染症の影響でシンポジウムは中止となった。

2021年度は「友好共同研究議定書」と「友好共同研究覚書」の改定に向け、双方で協議を進めている。

●中国遼寧省文物考古研究院との共同研究

当研究所と遼寧省文物考古研究院は、2017年５月に取り交わした友好共同研究協定書にもとづき、「三燕文化出土遺物の研究」と題する共同研究を実施してきている。本来であれば、2020年度は、上記共同研究の最終年度であり、年度内に日中研究者による学術研究会の開催と共同研究論文集の作成をおこなう予定であったが、2019年末に発生した新型コロナウイルス感染症の世界的拡大により、当初通りに計画を遂行することが困難となった。これを受けて、当初の計画期間、および協定書の有効期限を延長し、当面の間、双方の安全な往来が可能となるまで共同研究を中断することで、遼寧省側と合意し、６月24日付で本件に関する承諾書を取り交わした。

以上により、例年実施している遼寧省での資料調査が不可能となったため、これまでの調査で蓄積してきたデータの処理や、2019年度の調査時に採取したガラス製品のサンプルに対する鉛同位体比分析を実施する等、国内で可能な作業を粛々と進めた。また、昨年度刊行した学術論文集『東アジア考古学論叢Ⅱ―遼西地域の東晋十六国期都城文化の研究―』（奈良文化財研究所学報第98冊）のPDFデータを奈良文化財研究所学術情報リポジトリにて公開した。

●大韓民国国立文化財研究所との共同研究

奈良文化財研究所と大韓民国国立文化財研究所とは2016年４月に研究交流協定書、共同研究合意書、発掘調査交流合意書を更新し、これにもとづき「日韓古代文化の形成と発展過程に関する共同研究」および相互派遣による発掘調査交流を実施している。2020年度は５カ年計画の最終年度にあたる。

共同研究については、この５カ年の調査成果を総括するものとして令和３年３月に『日韓文化財論集Ⅳ』を刊行した。内容としては、日本側研究チームが６本、韓国側研究チームが６本の計12本の論文を所収した。なお、韓国語版として『韓日文化財論集Ⅳ』が令和２年12月に刊行されている。

発掘調査交流については、奈文研より国立慶州文化財研究所へ研究員１名を派遣し、国立慶州文化財研究所から研究員１名を受入れ、日韓双方で共同発掘調査をおこなう予定であったが、新型コロナウイルスの影響を受けて共に中止となった。

●アジア諸国等における文化財修復保存協力事業

当事業においては、近年は西アジア・中央アジア諸国等における文化財の調査研究や保存修復に関する情報収集や学術交流を継続している。2020年度には、オンラインシンポジウムThe Origin of Eurasian Foodways and Cuisines: Environmental challenges and culinary solutions to food globalization in prehistory（ワシントン大学セントルイス校、アメリカ合衆国、2020年11月７日）、Beyond being a pastoralist in Central Asia “Margins or Nodes” concluding online conference（ビリニュス大学、リトアニア、2021年３月26日）、韓国考古学会第44回全国大会（忠南大学校、大韓民国、2020年11月６日）において研究発表をおこなったり、中央アジア諸国の関係機関とのオンライン会議による共同研究の協議をおこなったりする等、オンラインツールを活用した国際的な学術交流を積極的に推進した。

●カンボジアにおける共同研究

奈良文化財研究所とカンボジアのアンコール・シェムリアップ地域遺跡保護整備機構（APSARA）は、1992年より共同研究を進めている。当事業では、アンコール・トム内に位置する西トップ遺跡における調査研究を進め、2012年より修復事業を開始した。

2015年に南祠堂、2017年に北祠堂の修復が完了し、現在は中央祠堂の調査修復作業をおこなっている。2019年度に中央祠堂基壇内側のラテライト基壇の調査と中成基壇までの再構築を完了している。2020年度は、７月に上成基壇の再構築、８月には仏像台座との取付部の再構築をそれぞれ完了した。９月からは中央祠堂躯体部の再構築を開始した。12月から１月にかけ

て四面の開口部の再構築、２月以降は壁体部の再構築を進めている。また、中央祠堂躯体部再構築にあたり、カンボジア文化芸術省の承認を経て、アンコール保存事務所に保管されていた中央祠堂に属する装飾石材を現地に戻す作業をおこなった。

●英国セインズベリー日本藝術研究所等との共同研究

セインズベリー日本藝術研究所（SISJAC：Sainsbury Institute for the Studies of Japanese Arts and Culture）は、1999年にロバート・セインズベリー卿とレディー・セインズベリー夫人の支援により、日本の芸術と文化に関する知識と理解を深めることを目的として設立された機関であり、過去から現在の日本の芸術と文化の研究を行うことを責務としている。

奈良文化財研究所とSISJACは、2015年12月に日本考古学の国際的研究の推進事業を共同して実施するための協定を締結した。以来、SISJACを中心として、ヨーク大学やケンブリッジ大学などの英国内の他機関も含めた、情報交換や共同研究、専門家の招へいなどの国際共同研究を進めている。

中でも2020年1月～4月にはヨーク大学のオリヴァー・クレイグ（Oliver E. Craig）教授を日本学術振興会外国人招へい研究者として招へいし、研究課題「考古生化学で探る農耕社会のはじまり」を遂行した。以後、同大学との共同研究を継続している。

また、2020年11月には日本考古学の成果を英語で紹介する書籍“An Illustrated Companion to Japanese Archaeology 2nd Edition”を、奈文研およびセインズベリー研究所の双方の研究者による共著の形で、イギリス・オックスフォードに所在する出版社である、Archaeopressより刊行した。

●カザフスタン共和国国立博物館との技術移転・人材育成事業

奈良文化財研究所とカザフスタン共和国国立博物館は、2018年３月に学術交流協定書を締結し、2019年４月から文化庁の委託業務である文化遺産国際協力拠点交流事業「カザフスタンにおける考古遺物の調査・記録・保存に関する技術移転を目的とした拠点交流事業」を実施している。

２年度目となる2020年度は、初年度の研修での要望を最大限取り入れる形で、３度の現地研修、１度の招へい研修を企画した。しかし、新型コロナウイルスの感染拡大のために計画を変更せざるを得ない状況となったため、当初対面式で計画していた研修を全てオンライン形式に切り替え、３度のオンラインセミナー「現場のための環境考古学」「金属遺物の保存処理」「カザフスタンにおける土器残存脂質分析の成果」を開催した。また、発掘現場で使える耐水・携帯用のマニュアル『現場のための環境考古学〈携帯版〉』のロシア語版をはじめとする、各種研修教材の作成をおこなった。

●台湾中央研究院歴史語言研究所との研究交流

木簡の分野では、2020年度は、「史的文字連携検索ポータルサイト」の公開をおこない、木簡・簡牘に書かれた文字データの共通検索を実現した。連携検索システムは奈文研版の他、中央研究院が独自開発したシステムもあり、中央研究院で公開されている。

カンボジア・アンコール遺跡群内の西トップ遺跡における修復作業の様子

英国ヨーク大学考古学科から日本学術振興会特別研究員として奈文研で研究活動に従事したオリヴァー・クレイグ教授

公開講演会

第12回東京講演会

2020年度は新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、対面による講演会は開催せず、特設サイト上でのオンデマンド配信による講演会として実施した。配信期間は2020年10月23日～11月5日。その後12月1日からはYouTube「なぶんけんチャンネル」にて配信（一部の講演を除く）。

◆前川 歩「CGでみる平城京―平城京のまちなみ紹介」

平城京復元CGを用いて、平城京のまちなみについて紹介した。平城京復元CGは、奈良市による1/1000平城京の復元模型（1978）をもとに、その後の主要な調査研究成果を加味し、都城発掘調査部で作成を進めたものである。

平城京のかたちとして、京の規模、条坊制、道路の規模、について解説した。平城京のまちなみとして、寺院を紹介し、平城京において展開した伽藍配置や大規模化する堂宇規模について説明した。続いて、貴族と庶民の宅地規模および配置される建物の違いを述べ、平城京に住む人々の生活を支えた東西市、それぞれの市に物資を運んだ運河についても説明し、平城京内の多様な活動の一端を紹介した。

◆和田 一之輔「平城宮に住まう人びと―貴族と役人の生活―」

平城京に居を構えた人々の姿を、身分や人口、宅地の立地と規模という側面から描きだした。平城京には、貴族をはじめ、平城宮で働く下級役人や庶民、彼らの家族、奴隷、僧侶等、10万人もの人が住んでいた。そして、身分階級に応じて宅地の規模が決まっており、身分の高い人物は平城宮に近い広大な土地をあたえられたのだ。しかし、こうした定説だけでは説明できないことも、日々の発掘調査の現場では見つかってきている。長岡京や平安京への遷都も視野に入れた、動態的な新たな仮説がもとめられている。

◆桑田 訓也「平城宮に勤める人びと―役人の一日と出世―」

平城宮は、天皇の住まいであると同時に、国家を支える役人たちが働く場所であった。

講演では、平城宮に勤める人びとについて、まず、都に住まう貴族から、仕丁や衛士等地方からの単身赴任者までを含めた全体像を概観した。

次に、役人の一日に焦点をあてて、出勤・退勤時間や宿直・給食、休暇や給与の種類等について紹介した。さらに、役人の勤務評価と出世のしくみについて解説し、木簡等の分析から判明した勤務と評価の実態について紹介した。

◆小田 裕樹「平城京の暮らし―娯楽と遊戯―」

平城宮・京から出土した遊戯具をもとに平城京で暮らす人々の娯楽・遊戯の実態について紹介した。

平城宮・京出土遊戯具の特徴からは木片等身近にある材料を利用し、簡易な加工を加えて遊んでいたことを指摘した。

また、古代の盤上遊戯「かりうち」について、出土資料に残る列点記号と『万葉集』、現代韓国の「ユンノリ」という遊戯をもとに復元した研究経緯を紹介した。

以上をふまえ、平城京の人々も様々な遊びを楽しんでいたこと、中国・朝鮮半島に由来する国際色豊かな遊びが多く、奈良時代の平城京の特質を反映していたと位置づけた。

◆森川 実「平城京の食生活―食材と料理―」

「平城京の食生活―食材と料理―」では、奈良時代の食文化を現代に続く要素（米食・麺食、海藻や魚介類の摂取、醤や末醤等発酵食品等の使用）と、古代のうちに失われた要素（葷辛類の利用等）とに区別し、それぞれについて解説をくわえた。とりわけ、万葉集第3825番歌の解釈にも関連させつつ、古代の陶臼がスパイスやハーブの加工用具であったとする説をあきらかにし、古代日本の食文化をアジア的視点でとらえ直そうとした視点は目新しく、新たな研究の方向性を示すものとなった。

◆山本 祥隆「平城京の借金事情―月借銭と出挙―」

借金（借銭）をテーマに、奈良時代の下級官人の実像や社会のあり様を考える講演をおこなった。

奈良時代の借金としては宝亀年間の写経所における月借銭が著名であり、とかく下級官人の困窮ぶりや生活破綻の象徴として理解されてきた。しかし、視野を借財全般に広げれば債務者救済の措置も多分に存し、かつ債務者もそれらをしたたかに利用していた可能性があることを指摘した。また、月借銭には一種の共同体として存立する官司運営の実態面や、平城京における銭貨の流通・使用の成熟を示すひとつの指標として理解する余地もあることを論じた。

◆神野 恵「平城京の疫病対策―医療・まじない・祈り―」

奈良時代におこった天然痘とみられる疫病蔓延について、文献資料と考古資料から平城京の疫病対策について紹介した。二条大路濠状土坑は、天然痘に罹患した人々が使った食器や生活用品をまとめて廃棄した感染拡大防止のためのゴミ捨て穴であることや、平城京の南方でみつかった前川遺跡が、天然痘の侵入を防ぐための道饗祭の痕跡であると論じた。また、天然痘以降、大型食器が減少し、小型食器が中心となることについては、新しい生活様式の定着と解釈した。

研究集会

◆遺跡整備・活用研究集会

2020年10月16日

「歴史的脈絡に因む遺跡の活用―儀式・行事の再現と地域間交流の再構築―」をテーマとして遺跡整備活用研究集会を関係者のみ12名で開催した。事例の発表者・所属と内容（副題略）は以下のとおり。内田和伸（奈良文化財研究所）「歴史的脈絡に因む遺跡の活用方法」、立石堅志（奈良市教育委員会）「特別史跡平城宮跡での古代行事再現」、幸喜淳（沖縄美ら島財団）「首里城公園における再現イベントの実施について」、江後迪子（食文化研究家）「大内氏遺跡での宴料理等「歴食」再現と地域性および中世の御成・茶会のたべもの」、大川勝宏（斎宮歴史博物館）「史跡斎宮跡の再現行事とその課題」、町田一仁（対馬博物館）「朝鮮通信使再現行事」、手島芙実子（鳩山町教育委員会）「南比企窯跡群と武蔵国分寺跡」であった。

総合討議をおこない、再現の方法や史実の伝え方等について情報共有と意見交換をすることができた。（内田 和伸）

古代官衙・集落研究会（第24回）

2020年12月12日

2020年度は「古代集落の構造と変遷（古代集落を考えるⅠ）」と題して研究集会を開催した。

研究報告は以下の4本である。道上祥武「古代集落の諸類型」、清水哲氏（茨城県教育財団）「島名熊の山遺跡の構造と変遷」、名村威彦・桐井理揮氏（京都府埋蔵文化財調査研究センター）「京都府における集落の構造と変遷」、藤村翔氏（富士市市民部文化振興課）「駿河国富士郡域における集落の構造と変遷」。研究報告終了後、報告者と事務局による総合討議をおこない、古代集

落遺跡の建物群の把握と集落構造・集落景観の分析方法、集落動態との関係や歴史的背景について活発な討議が交わされた。

今回の研究集会はオンライン併用で開催し、参加者は地方公共団体・大学関係者等計126名で、アンケートでは99％が有意義であったとの回答が寄せられた。なお、今回の研究集会の研究報告を2021年度に刊行する予定である。

このほか、2019年度に実施した研究集会の研究報告『灯明皿と官衙・集落・寺院』を2020年12月に刊行した。　（小田 裕樹）

科学研究費等

◆木簡等の研究資源オープンデータ化を通じた参加誘発型研究スキーム確立による知の展開

代表者・馬場 基　基盤研究（S）継続

本研究は、「木簡」を主たる対象として、参加誘発型スキームを確立し、そこで集積した知を用いて、研究を飛躍的に向上させることを目指すものである。2020年度は、以下の研究を実施した。

「IIIFにもとづく歴史的文字研究資源情報と公開の指針」に基づいて、ポータルサイト「史的文字データベース連携検索システム」を公開し、多機関国際連携を実現した。AI技術を用いて木簡の木目を除去し、墨痕を抽出する「木簡実測図自動作成システム（仮）」を開発し、実用化に向けた目処を確保した。また、やはりAI技術を用いて、類似する小片（削屑）を集める「自動クラスタリングシステム」の開発も進めた。

木簡整理作業をオールデジタル化して、あらゆる経験値を研究資源化するためのアノテーションシステムを、東京大学史料編纂所の技術協力を得つつ開発し、試作段階に到達した。また、筆跡に筆順情報等を付与するシステムを、２種類試作した。うち一つは、広く一般の協力と参加を促すスマホアプリである。

このほか、文字に関する知識の集積作業を実施した。

◆平城宮・京跡出土木簡とその歴史環境のグローバル資源化

代表者・渡辺 晃宏　基盤研究（A）継続

東アジア木簡学の構築に資すべく、発掘情報、文献資料、地理情報とのリンクにより、日本最大の木簡包蔵地平城宮・京跡の木簡情報の共有資源化を図るものである。

2020年度は４年計画の３年目で、引き続き（１）平城宮・京跡の発掘調査成果（遺構、および共伴遺物）を木簡データベース「木簡庫」にリンクさせるシステムの構築、（２）『平城京編年史料集成（稿）』作成に向けた資料収集、の２点を中心に研究を遂行した。

このうち（１）では、2019年度に平城宮・京跡を対象に開発したWebGISシステムのβ版（Heijo Heritagemap）を、奈文研の文化財情報検索システムと統合する形でより利便性を高め、「全国文化財情報・古代都城WebGIS」として拡充したうえで、業務用として所内公開した。

◆災害で埋没した建物による民家建築史の研究

代表者・箱崎 和久　基盤研究（A）新規

火山の噴火やそれにともなう洪水等によって、当時の民家や集落等が埋没し、発掘調査で建築部材を伴いながら発見されることがある。本研究ではそうした建築、とりわけ民家を中心に建築史の中に位置づけることを目的とする。当面は1783年の浅間山の噴火に伴って発生した泥流により、埋没した吾妻川流域の民家を対象とする。研究予定期間は５年。

2020年度は、上記吾妻川流域の発掘調査で、報告書が刊行されている上郷岡原遺跡や東宮遺跡等から、建築部材をともなう建物を抽出し、出土建築部材の把握をおこなった。また、報告書を作成中の石川原遺跡について、群馬県埋蔵文化財調査事業団に赴いて情報収集をおこない、遺構と出土建築部材に関する図面や写真等の基礎的データから、建築部材の大きさや特徴等を把握する作業をおこなった。

一方、当地の民家建築史を構築してきた現存民家について研究史を収集した。さらに民家の悉皆的調査をおこなうことで、これまで見過ごされてきた近世に遡る中小規模の民家を把握する試みを開始した。この成果は地域の文化財の綜合把握にも寄与できる。コロナ禍で予定していた調査ができなかったが、群馬県長野原町の調査を１回おこなった。この悉皆的調査は研究分担者の横浜国立大学大野敏教授、東京大学海野聡准教授とともにおこなっている。

◆木簡の年輪年代学：同一材推定による再釈読と荷札木簡を用いた地域標準年輪曲線の構築

代表者・星野 安治　基盤研究（B）継続

木簡を対象とした年輪年代学的な同一材推定および荷札木簡を用いた地域標準年輪曲線を構築することにより、木簡から考古資料としての新たな価値を引き出し、考古学・古代史学・年輪年代学が融合した研究を推進する。2020年度は、平城宮第一次大極殿院西楼から出土した木簡群に対して年輪年代学的手法を適用した検討をおこなった。西楼からは1,000点以上の削屑が出土しているが、この削屑の中には良好な柾目材のものも多く含まれ、人名等を記す記載内容、および筆跡や木目の類似等より、整理作業時点ですでに同一簡に由来する可能性が想定されていた。検討の結果、同一材と考えられる削屑が多数見出され、年輪年代学的にも同一簡由来のものが含まれる可能性を支持することができた。一方で、同一材に由来する可能性が高いにも関わらず、木取りと文字の天地が異なるグループが見出され、本木簡群に関する様々な理解が深まる可能性を秘めるものとなった。現在、同一遺構出土の削屑200 点余りを検討中であり、さらなる成果があがることが期待される。

◆南都の未整理文書聖教にもとづく寺社とその周辺社会の調査研究

代表者・吉川 聡　基盤研究（B）継続

３年目である2020年度は、個人蔵の興福寺関係文書について、悉皆的な整理・調査を実施した。その結果、当該資料は当研究所に寄贈された。また、奈良の旧家の個人蔵の資料について、研究協力者とともに、戦国時代文書の調査・釈文検討作業をおこなった。その他、東大寺所蔵の興福寺関係の日記の中から、元禄５年の日記の翻刻作業をおこなった。

◆松帆銅鐸発見を契機とする銅鐸論の再構築

代表者・難波 洋三　基盤研究（B）継続

2020年度は、『松帆銅鐸調査報告書Ⅱ』の刊行に向け、淡路島から出土した銅鐸と出土の伝承がある銅鐸の調査と原稿作成をおこなった。難波が分担したのは、伝淡路川出土鐸、推定淡路出土辰馬409鐸、倭文鐸である。また、銅鐸の祖型とする研究者も多い東奈良遺跡出土小銅鐸について、昨年度に実施した鉛同位体比分析とICP分析の成果を踏まえ、その位置付けを検討した。この論文は、2020年度末刊行の『茨木市立文化財資料館館報』第６号 に掲載する。このほか、辰馬考古資料館所蔵の宮崎県持田古墳出土銅鏡３面の鉛同位体比分析とICP分析もおこなった。同工房で同時期に鋳造されたと考えられるこれらの銅鏡の分析結果は、古墳時代における青銅原料の流通・入手状況を解明する上で、今後、重要な基礎データとなるであろう。

◆和同開珎の生産と流通をめぐる総合的研究

代表者・松村 恵司　基盤研究（B）継続

当研究所の「地方官衙関係遺跡データベース」を利用して官衙・寺院関連遺跡の分布図を旧国単位に完成させ、和同開珎と帯金具の出土遺跡分布図の三者を合成する作業に着手した。

また、古代銭貨に関係した木簡の集成作業をおこない、編集作業と並行して解説文を執筆し、2020年度末に『古代銭貨関係木簡集成』（A4判、本文246頁、写真図版10頁）を刊行した。

黒川古文化研究所所有の和同開珎銭笵の三次元計測、CTスキャン、光拓本、蛍光X線分析等の自然科学的分析を実施した。さらに、古代の権衡制度の復元に向けて、日唐の出土銀鋌と重量表記のある金銀器を集成し、１両の現今重量を復元した。

◆中央アジア 天山―パミール地域における後期旧石器文化成立過程の研究

代表者・国武 貞克　基盤研究（B）継続

2020年は2019年タジキスタンで発掘調査を実施した初期後期旧石器時代（IUP期）のフッジ遺跡の調査成果についてその概要を論文にまとめた。日本列島の石刃石器群としては最古の年代値が期待される長野県佐久市香坂山遺跡の第１・２次発掘調査を実施した。その結果、ユーラシアにおける現生人類の最古の後期旧石器文化（IUP石器群）と酷似する技術構造と石器組成をもつ石器群を検出した。放射性炭素年代分析を実施したところ、石刃石器群としては列島最古の年代が得られた。これについて論文をまとめ国内査読誌に投稿した。なお研究成果の重要性から遺跡の年代決定のための大規模共同研究体制を、国内の複数の研究機関により構築した。これまでの後期旧石器時代開始期の年代を遡る年代値が集積しつつあり、その成果について2021年度以降に順次公表する予定である。香坂山遺跡の調査成果について専門家向けに公開し、資料検討をおこなう研究集会を企画したが、実施予定の会場の感染症対策により、2021年度に延期を余儀なくされた。このほかに、タジキスタンにおける中期旧石器文化の研究現状と課題についてまとめた総説論文を国内査読誌から出版した。また中央アジア西部におけるIUP石器群の石器群の構造と技術的な特徴、アルタイ山地における同時期石器群との比較や、その起源および系統について検討し論文を執筆した。その成果をもとにして『中央アジア初期後期旧石器文化の研究』（奈良文化財研究所研究報告第29冊）を執筆編集し刊行した。

◆３次元データによる瓦の同笵認識技術の基礎的研究

代表者・林 正憲　基盤研究（B）継続

本研究ではSfM-MVSの技術を導入し、平城京・藤原京出土瓦の基準資料の精密な計測を通じて、従来「同笵瓦」と認識されてきた資料の再検討をおこなうものである。将来的には、計測データを内外の研究者らに公開し、３次元データを用いた研究が、主要な研究手法の一つとなることを目指している。

２年目となる2020年度は、これまで進めてきた東大寺式軒瓦（6235・6732型式）の計測の続きとして、それらの派生型式の計測をおこなうと共に、特定型式（6234・6647型式等）の個体を集中的に計測し、客観的な同笵関係の把握のための分析をおこなった。また、鴟尾や鬼瓦等、比較的大型の道具瓦の分析を可能とするための設備を導入し、計測・分析をおこなった。

◆災害碑アーカイブ構築を目的とした市民参加型調査の実践

代表者・上椙 英之　基盤研究（B）継続

本研究は、市民科学の手法を用いた石碑データの収集を目的とする。収集に使用するツール「EpiScan」は、シニアや中高生でも容易に使用でき、手順は簡便であり特別な機材を必要ともしない。２年目にあたる2020年度は当初は市民の撮影講習会を計画していたが、新型コロナウイルス感染症の影響により市民を集めるイベントの企画は中止とした。代替として、研究協力者と分担者にのみソフトを配布し、各研究拠点近隣地域である宮城県仙台市・山元町、岩手県奥州市・一関市、福井県敦賀市、大阪府東成区、宮崎県延岡市・宮崎市で２～３人の少人数での撮影実験をおこなった。

◆ユーラシア東部における細石刃石器群の出現と拡散：中国北部クロスロード仮説の検証

代表者・加藤 真二　基盤研究（B）新規

中国北半部（華北地方、中国東北部）において細石刃石器群が出現し、日本列島を含むユーラシア各地に拡散したという仮説を検証し、ユーラシア東部における後期旧石器時代の人と文化の動きを動的に解明しようとする研究。コロナ終息後に実施する海外調査に備え、中国の研究協力者と連絡を密にとるとともに、剥片・石核の打面の顕微鏡観察により打撃方法の判定が可能かどうか、観察と実験を開始した。

◆蛍光X線分析と鉱物組成分析による大和の古代寺院・宮都出土瓦の生産・供給体制の研究

代表者・清野 孝之　基盤研究（B）新規

本研究は、大和の古代寺院・宮都出土瓦と同笵または深い関わりが推定される瓦について、理化学的分析（蛍光X線分析、鉱物組成分析）、考古学的調査を合わせておこない、その生産と供給の実態をあきらかにしようとするものである。研究期間の１年目に当たる2020年度は、大和の古代寺院・宮都出土瓦と同笵の軒瓦の探索のほか、川原寺創建軒丸瓦601Cと同笵の福岡県太宰府市観世音寺出土軒丸瓦、香川県善通寺市仲村廃寺採集軒丸瓦、藤原宮所用軒平瓦（6647E）と同笵の香川県さぬき市願興寺採集軒平瓦等の調査をおこない、大和の古代寺院・宮都所用瓦の生産の様相を把握するための手がかりを得た。

◆埴輪の生産・流通体制の総合的検証にもとづく王権中枢部巨大古墳群造営過程の解明

代表者・廣瀬 覚　基盤研究（B）新規

本研究は、奈良市平城宮東院下層埴輪窯とその供給先と目される佐紀古墳群東群から出土した埴輪を主な素材とし、考古学的検討はもとより、三次元計測や考古科学的分析も駆使して、王権膝下の巨大古墳群における埴輪の生産・流通体制を多角的かつ実証的に分析することを目的とする。

初年度となる本年は、SfM-MVS法による三次元計測のための機器類を整備し、埴輪の計測作業を鋭意遂行した。11月28・29日には所内外の分担者・協力者を招聘して第１回目の検討会を実施し、対象資料の内容や検討課題について意見交換をおこなった。

◆古代都城から出土する製塩土器の生産地推定

代表者・神野 恵　基盤研究（B）新規

2020年度は、これまでの分類で２－b類としていた紀淡海峡産の筒型製塩土器について、山梨文化財研究所の河西学先生に分析を依頼し、胎土中に含まれる鉱物の同定をおこなった。その結果、同一生産地と推定していた資料群のなかでも、生産地に一定のバラツキがある可能性がでてきた。また、パレオ・ラボに依頼し、ガラスビード法による粘土成分の分析手法に関する分析規格の統一化とその検証をおこなった。さらに、３次元計測による製塩土器の容量計算等に関わる研究にも着手した。

◆土製鋳型を中心とした冶金関連資料による東アジア冶金史学の構築

代表者・丹羽 崇史　基盤研究（B）新規

本研究は、春秋戦国時代の山西省侯馬鋳銅遺跡出土土製鋳型、ならびに砥石・羽口等冶金関連資料の調査・分析を主体として、日中双方の研究蓄積を共有にもとづく「東アジア冶金史学」の構築を目指すものである。2020年度は初年度にあたる。

2020年度は新型コロナウイルス感染症の影響により、予定をしていた中国での調査が実現できなかったため、日本国内での調査や関連資料の資料収集に重点を置いた。まず富山県高岡市の鋳造工房や高岡市博物館にて土製鋳型等鋳造に関する民具資料の調査を実施した。また、今後予定している侯馬鋳銅遺跡の出土砥石・鋳型の調査に備え、研究分担者とともに比較事例として平城宮・京域の鋳銅遺跡出土砥石の調査を実施した。そのほか、中国出土冶金関連遺物・青銅器等の資料や平城宮・京出土の冶金関連遺物の集成を進めたほか、関係者と今後の調査・分析に向けての協議を進めた。

研究成果の一部は、論文として公表したほか（丹羽崇史「製作技術からみた九連墩墓地出土青銅鼎―「同模品」と製作痕跡の分析による戦国時代青銅器生産体制・供給形態の検討―」『岩永省三先生退職記念論文集：持続する志』）、日本中国考古学会2020年度大会（2021年１月９日オンライン開催）にて誌上発表をおこなった（丹羽崇史「東アジアにおける「北方系」湾曲羽口の展開」）。

◆古建築用語の相互訳及び英訳を通した系統的把握による東アジア木造建築史の基盤構築

代表者・鈴木 智大　基盤研究（B）新規

本研究は、東アジア木造建築史の構築に向けた研究構想の一環として、東アジア各国の木造建築を、社会的・技術的・自然環境的な側面から比較研究するものである。

2020年度は、東アジアの建築用語に関する基礎的な整理と翻訳をすすめた。とくに日本建築用語の中国語訳、韓国建築用語の日本語訳を重点的に推進し、他言語における翻訳、整理の手法を探求した。

なお当初の計画では、海外における調査も見込んでいたが、2020年度は新型コロナウイルス感染症拡大の社会的な状況を受けて、実施できていない。引き続き、社会的な状況を見守りながら、計画を再考したい。

◆カザフスタンにおける現生人類北回り拡散ルートの解明に関する国際共同研究の基盤強化

代表者・国武 貞克　国際共同研究強化（B）継続

2019年に発掘調査を実施したカザフスタン南部のクズルアウス２遺跡の炉跡出土の炭化物の放射性炭素年代測定を実施した。後期旧石器時代前期（EUP期）後半のほぼ1000年刻みの年代差をもつ石刃石器群の変遷があきらかとなった。カザフスタン南部、中国北部、九州を横断的に比較した第３回中央アジア旧石器研究集会（2019年11月実施）の記録集を中央アジア研究報告第６冊として執筆編集出版した。またカザフスタン南部のビリョックバスタウ・ブラック１遺跡の発掘調査成果にもとづき、中央アジア西部におけるEUP期石器群の構造分析を英語論文にまとめ国際査読誌に投稿し受理された。他にカザフ国立大学主宰の中央アジア先史考古学会議において、クズルアウス遺跡群の発掘調査成果と天山山脈北麓の遺跡踏査成果についてオンラインで口頭発表をおこなった。またロシア科学アカデミーモスクワ考古学研究所と共同で、カザフスタン南部のラハット遺跡の石器組成分析とOSL年代分析を実施し、その成果発表と討論を目的としたモスクワ考古学研究所主催の国際研究集会口頭発表とセッションを主宰した。他に、カザフスタン国立博物館が主催するオンライン会議「カザフスタンの旧石器研究：国際考古学共同遠征調査成果」に参加し、2017年から2020年までの日本―カザフスタン共同調査成果について口頭発表をおこなった。

◆律令制下の土器生産―須恵器・土師器群別分類の再構築

代表者・神野 恵　基盤研究（C）継続

2020年度は、ガラスビード法による分析結果から、須恵器に比べ土師器にはリンが多くほど含まれることから、須恵器は山土を用い、土師器は田土を用いた窯業製品であると結論づけた。この成果について、日本文化財科学会のポスター発表をおこない、ポスター賞を受賞した。また、平城京近郊の須恵器に生産について、これまでの成果をまとめた論文「平城京近郊の須恵器生産」『奈文研論叢』第２号を発表した。採集資料の再整理を基に、平城京遷都時の計画として、奈良山丘陵の東側に須恵器生産地を、西側には瓦生産地を排他的に配置した可能性を指摘し、奈良時代後半に始まると考えられていた都城近郊型の須恵器生産が、奈良時代初頭には計画されていたことを、瓶原離宮の推定地と絡めて論じた。

◆古代の灯火―先史時代から近世にいたる灯明具に関する研究

代表者・深澤 芳樹　基盤研究（C）継続

本研究では、光を生みだす人工的なしくみを照明具と呼ぶ。現代にいたるまでその多くは、有機成分が酸化したときにおきる発光現象を利用してきた。樹木を燃やす松明等は、その例である。しかしこれは野外においては有効であっても、室内では燃焼の持続時間と発光量、それに管理の問題から、不適当であった。飛鳥時代以降日本列島にあらわれる、植物油料を燃料にした、灯心で発光させる灯火器は、この問題を解決したといえよう。

１年延長した本2020年度は、これまでの研究成果をまとめる期間とした。そこで、民俗資料の検討、考古資料と民俗資料の連結、中国、韓国の研究成果とその翻訳、出土資料における油質成分分析の基本原則、日本の出土灯火器の総合的検討等を実施した。

◆６世紀の埴輪生産からみた「部民制」の実証的研究―奈良盆地を中心に―

代表者・廣瀬 覚　基盤研究（C）継続

本研究は、律令国家成立以前の支配制度である「部民制」について、６世紀の埴輪の生産・流通体制からその実態をあきらかにすることを目的とする。補助事業延長期間にあたる2020年度は、コロナ禍の制約をうけつつも、可能な範囲で補足の資料見学を実施し、６世紀代の奈良盆地およびその周辺地域における埴輪の生産・流通体制に対する理解を補強することができた。それを踏まえて、研究期間内の成果を報告書としてまとめ、刊行した。同報告書は奈良文化財研究所学術情報リポジトリにて公開しており、詳細はそちらを参照されたい。

◆古代における食生活の復元に関する環境考古学的研究

代表者・山崎 健　基盤研究（C）継続

本研究の目的は、遺跡から出土した食料残滓から、古代における食生活をあきらかにすることである。2020年度は新型コロナウイルス感染症の拡大にともない、予定していた調査を制限せざるを得なかったが、これまでの研究成果の論文化を前倒しで進めることができた。

千葉県域の91遺跡565遺構から出土した約64万個体の貝類（古墳時代中期～古代）を検討して、上総・下総国域における貝類利用（採集・流通・消費）の実態をあきらかにした。この成果をまとめた論文が『奈文研論叢』に掲載された。また、近江貝塚研究会で『東京湾東岸における律令国家形

成期の貝類利用』と題したオンラインでの口頭発表をおこなった。

◆Sr同位体比分析による日本出土「ナトロンガラス」の産地に関する考古科学的研究
代表者・田村 朋美　基盤（C）継続

本研究では、日本出土のガラス製遺物のSr同位体比分析を実施し、これまで特定することのできなかった生産地の特定を目指すものである。2020年度は、これまでに実施した同位体比分析の結果について学会報告するとともに、Sr同位体比にNd同位体比を組み合わせたナトロンガラスの産地同定についても試みた。

◆展示施設を拠点とする地域住民参加型の歴史的建造物の調査
代表者・西田 紀子　基盤研究（C）継続

本研究は、展示施設を拠点に、地域住民のネットワークや地域に潜在する文化財を活かして、歴史的建造物や景観の変遷を調査研究することを目的とする。

4年目となる2020年は、地元の大字が保管する地籍図の調査をおこなった。また、地域で保存されてきた古写真のスキャンをおこない、現状の集落景観との比較研究を進めた。また、こうした調査成果の一部を、明日香村文化協会の総会で紹介し、地域住民との意見交換や、新たな資料の所在等について情報を得た。2021年度は、こうした情報をもとに、集落の歴史的建造物の所在確認等のフィールドワークを進めたい。

◆呪符木簡の時代的地域的特質からみた「木に文字を記す文化」の史的考究
代表者・山本 崇　基盤研究（C）継続

本申請研究は、呪符に込められた祈りや願い等人びとの心性の時代的地域的特質を検討することにより、「木に文字を記す文化」の日本的特質をあきらかにしようとするものである。4年目にあたる2020年度には、釈文の入力作業を進め、釈文集（稿）を作成した。なお、世情穏やかならず探訪調査を自粛しているため、資料の撮影、熟覧調査は滞っている。そこで、研究期間を延長し2021年度に研究のまとめをおこなうこととした。

◆初期官衙における空間構造の成立と展開に関する実証的研究
代表者・小田 裕樹　基盤研究（C）継続

本研究は、古代宮都と地方官衙の建物・空間内でおこなわれた活動と空間利用の実態を考古学的分析によりあきらかにすることにより、「ロの字形」を呈する初期官衙の歴史的特質の解明を目的とする。

研究3年目にあたる2020年度は、2019年度に引き続き古代宮都および地方官衙の各遺跡の実地踏査を実施した。特に、常陸国域および筑後国域を中心に郡庁・拠点集落遺跡の実地踏査と出土遺物の実見調査をおこなった。

また、飛鳥・藤原地域のロの字形建物と平城宮内の饗宴空間に関する学術論文を執筆し、公表した。

◆飛鳥時代・奈良時代の土器様式からみた日本古代の食具様式および食事法の復元的研究
代表者・森川 実　基盤研究（C）継続

本研究は、飛鳥時代・奈良時代における食器の器名研究と、土器の考古学的研究とを通じて、日本古代の食器・食具様式および食文化を再現しようとするものである。

2020年度は最終年度にあたるため、これまでの2か年にわたる研究成果をふまえ、研究成果報告書『正倉院文書にみる古代食膳具の研究』を執筆編集し刊行した。このほか、平城宮・京出土土器（奈良時代）について計量的データの収集を実施し、その成果の一部を上掲の研究報告書において公表した。

◆藤原宮造営に伴う造瓦の新技術とその導入経路に関する総合的研究
代表者・石田 由紀子　基盤研究（C）継続

本研究は藤原宮造営という大事業に際し、瓦生産分野でおこなわれた技術改良や国内外との技術交流の実態を把握することを目的とする。

3年目となる2020年度は、藤原宮の複数ある瓦窯のうち、日高山瓦窯を含む発掘調査事例がある9つの瓦窯について、窯構造の比較や分析をおこなった。これらの研究成果については現在学術論文としてまとめており、来年度に公表する予定である。また、藤原宮から出土した日高山瓦窯産の軒瓦について、製作技法や笵傷進行について研究を進めた。

◆近世における北前船と東北産木材の流通に関する年輪年代学的研究
代表者・光谷 拓実　基盤研究（C）継続

2020年度は、コロナ禍のため当初予定していた現地調査を実施することはできなかったが、2019年度実施した福井県下に所在する近世の建物（3棟）の部材から計測収取した年輪データを見直すとともに、年輪パターン照合の詳細な検討をした結果、床板や縁板、壁板類のなかに東北産ヒバ材の暦年標準パターンと一致するものが少数ではあるがいずれの建物からも確認された。

このことから、北前船によって日本海経由で運ばれた東北産ヒバ材が当該地域の建築用材として使われていたことを実証することができた。

◆近世末期から近代に生じた日本庭園の意匠の地域性と現代への継承―出雲地方を中心に―
代表者・中島 義晴　基盤研究（C）継続

出雲地方には、住宅等の座敷に面する平坦地を白砂敷きとして、短冊石という細長い長方形の切石や円形の石を飛石に用いて主景とする庭園が数多くあり、それらの意匠が現代も地域に深く根付いている。本研究では、このような地域的な特徴がどのように生まれたのかをあきらかにすることを目的とする。

2020年度は、短冊石が使われた庭園に関する情報収集を続け、岡山県・徳島県・大分県内の庭園の現地調査をおこなった。

◆鎖国期日本のマジョリカ陶器色絵フォグリー文アルバレルロとカトリック修道院
代表者・松本 啓子　基盤研究（C）転入

イタリア発祥の高級陶器・マジョリカの色絵フォグリー文アルバレルロが鎖国期の日本に輸入された。アルバレルロは薬壺で、修道院薬局に同一型式の壺が多数並ぶ。色絵フォグリー文は16世紀後半の葉文で、日本出土壺本体の作りは17世紀中頃のアムステルダム出土品に酷似する。

ゆえに、欧州に日本の色絵フォグリー文壺と同一型式がなく、前代の意匠の模倣壺と考えた。本研究はカトリックにしかない修道院の色絵フォグリー文アルバレルロの情報を禁教令下の日本に誰が提供し得たのかを探る。

2020年度は国内の研究発表と出土地の鎖国までのカトリックとの関わりを中心に研究を進め、海外調査は控えた。

◆塩類風化が進行する遺跡構成材料からの効果的な脱塩方法の開発
代表者・脇谷 草一郎　基盤研究（C）継続

本研究は磨崖仏や横穴等のように、岩盤、地盤への水および塩の供給を絶つことができない環境にある遺跡を対象に、1）それらを構成する材料中の塩の移動および破壊プロセスのモデル化、2）塩析出を抑制する環境条件の提案、および3）遺跡表面に集積する塩の効率的な除去方法の開発を目的とする。2020年度は引き続き適切な脱塩材の選定をおこなうとともに、塩析出による材料破壊プロセスのモデル化を目的として、磨崖仏や横穴等に多用される砂

岩や凝灰岩等の軟岩について、様々な含水状態における力学的特性の実測をおこなった。

◆ポスト・バイヨン期のクメール建築の建築的特徴に関する研究

代表者・大林 潤　基盤研究（C）継続

本研究は、カンボジア・アンコール地域のクメール建築において、13～15世紀のアンコール王朝末期（ポスト・バイヨン期）の遺跡を整理し、それぞれを比較研究することにより、この時期のクメール建築の特徴をあきらかにすることを目的とする。2020年度は、新型コロナウイルス蔓延の影響で、カンボジアでの現地調査、資料調査をおこなうことができなかった。アンコール地域の遺跡については、比較研究のための平面図の収集をおこなった。

◆日本と中国における大工道具の比較による東アジア木造建築技術史の基盤構築

代表者・李 暉　基盤研究（C）継続

本研究は、中国と日本の伝統的大工道具に関する比較研究を通して、東アジアの建築文化圏における古代建築造営の技術のさらなる解明を目指すものである。第２年度となる2020年度は、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、中国と日本における現地調査を次年度に延期し、近年の中国における発掘調査で出土した、建築の造営に用いられたと考えられる大工道具に関する整理作業を実施した。また本研究の成果として、日本建築学会大会にて、古代中国の出土鉄斧と鉄錛について報告した。

◆絵画表現の多様性を生みだす彩色材料のナノ構造

代表者・杉岡 奈穂子　基盤研究（C）新規

本研究は、染色・絵画文化財で用いられている彩色材料のもつある特殊性が、絵画表現あるいは技法にどのような効果をもたらすのか、材料科学的側面からあきらかにするものである。顔料と染料を組合せる彩色表現について、微細構造観察により絵画の製作工程を通して発色のメカニズムをあきらかにし、絵画技法を生み出す彩色材料の特性を得る。有機物で構成されている染色・絵画材料への観察手法の確立により、それぞれに必要な試料作製技術および最適な試料測定手法の開発等を検討し、新しい染色・絵画研究手法の基礎を確立する。退色・劣化している天然染料の痕跡を確認する手法を開発する。将来的には、先端科学、特に材料科学の視点から「物質・材料」として絵画材料を解明し、保存・修復のための基礎データだけでなく、芸術の創造、美の認識に関する先端科学分野にも役立てたい。

◆東アジア出土の植物灰ガラスは西アジア産か？―ガラス交易路解明に向けての基礎研究―

代表者・田村 朋美　基盤研究（C）新規

本研究では、従来の蛍光X線分析に加えて、同位体比分析および超微量成分分析を適用することで、東アジアで流通した植物灰ガラスの具体的な生産地をあきらかにし、ユーラシア大陸おけるガラス交易に大きな変化をもたらした要因の解明を目指すものである。2020年度は、日本で出土した植物灰ガラス製の重層ガラス玉についてSr同位体比分析をおこなった。その結果、シリア内陸部等の中東地域で出土する植物灰ガラスに比べて高いSr同位体比を持つことがあきらかとなった。酸化カリウム（K_2O）をやや多く含むという化学組成の特徴と併せると、中央アジア産のガラスの可能性が高まったといえる。

◆先端技術による未発見遺跡の探査・研究および保護手法の開発

代表者・金田 明大　挑戦的研究（開拓）継続

2018年度より解析をおこなっている春日山・三笠山周辺のLiDARデータについて基礎的な整理をおこない、地表標高モデル（DEM）を作成した。また、2019年度に取得したUAV（空中ドローン）を用いた高密度なLiDARデータについても同様の作業を進め、地形情報の整備を目指している。

また、DEMとして得られた地形の特徴量を抽出する複数の方法を検討し、これらの適用を試験的に試みた。傾斜量や開度等の情報の重合により人工的な改変や災害による地形変化を生じた部分の可視化や明瞭化を検討しているが、複数の情報を重合させることによってよりこれらの様子を明確にすることが可能と考え、その効果的な組み合わせを含めた検討を進めている。

また、現地の踏査を実施し、地形の改変や古墳・窯の分布等について現地における検討をおこなった。当初予定していた複数人での十分な踏査は困難であるが、抽出が可能な部分は勿論のこと、それが十分に表現できていない箇所についてその原因を検討している。

実際には踏査を基にした遺跡探査を計画していたが、2020年度はできなかった。反面、廉価型RTK-GPSによる高精度位置決定とその補助による探査の高速の試験をおこない、より迅速な計測を可能とする研究を進めた。

2019年度より開始した春日大社所蔵の考古資料については三次元計測、観察、写真撮影、実測図の作成といった基礎的な資料調査を完了し、返却できた。今後、これらの資料の検討を所蔵者および関連する研究者を含めて実施し、位置づけをおこなっていきたい。

◆歴史災害の実像解明への考古・歴史・地質学的複合解析による災害履歴検索地図の開発

代表者・村田 泰輔　挑戦的研究（開拓）継続

３年目に入った本研究は、奈良県および京都府の発掘調査で発見された、地震と洪水の痕跡を含む約２万地点の発掘調査情報を集成し、データベース化した。その結果、地すべりや地割れ、倒壊痕跡が奈良盆地東方丘陵域、生駒山地付近に、奈良盆地に液状化痕跡が集中する様相や、地震発生に複数の画期があることがわかってきた。

くわえてデータベース表示のアンケート調査を実施した。地点表示について、多くの問題点があきらかとなり、2021年度への改善課題となった。

◆機械学習による画像自動分類を活用した考古学ビッグデータの構造化と情報探索への適用

代表者・高田 祐一　挑戦的研究（萌芽）新規

本研究では、膨大な情報資産を「考古学ビッグデータ」と捉え、機械学習により構造化を進めることにより流通性と再利用性の向上をはかる。

2020年度は、2019年度のプログラムと教師データを活用し、PDFから82万件の画像を自動抽出した。その画像群からさらに石器の種別ごとの教師データ54種類を作成した。機械学習にて類似度を算出し、石器種別ごとに類似画像を表示できるようになった。

◆土器残存脂質分析を用いた縄文―弥生移行期における土器利用と食性変化の追跡

代表者・庄田 慎矢　若手研究（A）継続

本研究は、土器残存脂質分析の方法を主に用いて、縄文時代から弥生時代にかけて、日本列島の各地でどのような食性・調理内容の変化があったのかを実証的に追跡しようとするものである。最終年度の2020年度には、北部九州・中部高地・東海・関東・東北等日本各地の遺跡から出土した土器400点余りから抽出した残存脂質をガスクロマトグラフィーによって分析し、生物指標の有無や特定化合物の異性体比率を検討した。その結果に基づき地域・時期による資源利用の変化を追跡したところ、縄文時代から弥生時代の移行期における水産資

源や植物資源の利用状況の変化が、地域によって異なるパターンを見せることがあきらかになった。

◆地理情報システムを用いた古代日本における移動コスト算出の基礎的研究

代表者・清野 陽一　若手研究（B）継続

最終年度となる2020年は、2018年に実施したGPS/GIS等の機器を用いた歩行実験の続編として、美濃国府から平安京までの歩行実験をおこなった。貢納国から京に向かう際、移動する人はどの程度の荷重をともなって移動しているかが問題となる。今回は、延喜木工式人担条にもとづき、40kg強の荷物を背負って実験をおこなったが、日常的に運動をしている現代人にとっても、この荷重は非常に過酷であった。あわせて、この条文内の数値の妥当性を検証するために、京都市が所蔵する平安時代前期の瓦の重量計測もおこなった。

◆彩色文化財のTHz ImagingおよびμFocusX線CTを用いた非破壊界面調査

代表者・金 旻貞　若手研究（B）継続

本研究では、彩色文化財の内部構造を調査する手法としてTHz波イメージング法を用いた。研究の結果、内部構造調査にはTHz時間領域分光法を用いるのが効果的で、特に層構造の解析には反射ピークおよび断面情報が有効であるといえる。また、μFocusX線CTを用いた比較研究からはCTで層厚に影響されるがTHz波は粒径が影響するため複雑な層構造や厚みがあるサンプルでも調べられることを再確認することができた。

新型コロナウイルス感染症で調査および成果発信の遂行が遅れたが最終年度にあたり、これまで公表した研究発表をとりまとめ学術雑誌に投稿する予定である。

◆地震痕跡を残す災害遺構の保存と公開活用に関する研究

代表者・小沼 美結　若手研究（B）継続

研究は、国内外で発生した大規模な自然災害の跡地や痕跡（災害遺構）とその関連施設について、保存に至った経緯と現状を網羅的に調査し、得られた知見を今後の災害遺構の保存と活用に活かすことを目的とする。

最終年度である2020年度は、これまでに実施した災害遺構の記録や文献による調査データの整理をおこなった。そして、2019年に現地調査を実施した台湾の台中周辺に保存されている災害遺構（921地震教育園区や車籠埔断層保存園区等）の活用状況を中心に、研究成果を紀要で報告した。

◆古墳時代中期王権中枢部における埴輪生産体制の実証的研究―奈良市佐紀古墳群を中心に―

代表者・大澤 正吾　若手研究（B）継続

本研究は、ウワナベ古墳出土埴輪を中心に佐紀古墳群出土埴輪の整理・研究を通じて、古墳時代中期の王陵級古墳における埴輪群組成の実態をあきらかにすることを目的とし、畿内中枢部における埴輪生産体制の時系列的な変化とその背後にある王権による労働力編成の在り方を実証的に論じることを目指す。４年目となる2020年度はウワナベ古墳出土埴輪について整理と検討を引き続きおこなったが、未完であるため2021年度まで期間を延長し研究を継続することとした。

◆渤海遺跡出土建築部材の基礎的研究―三次元計測データの活用

代表者・中村 亜希子　若手研究（B）継続

本研究では、渤海国の紋様塼を、SfM-MVSによって三次元計測することで、紋様・成形型を復元し、その変遷を考察してきた。

2020年度には、画像形式やサイズ、解析の設定等による取得データの特質を比較・検討し、成果を日本文化財科学会第37回大会にて報告した。また、文化財分野におけるSfM-MVSの普及を促進するために、手法をYouTube（「SfMの中村さん」）等にて公開した。2021年度には、未計測資料の計測・分析、過去に計測した瓦当の三次元データの再検討をおこない、研究を総括する予定である。

◆奈良時代に用いられた色材・素材のナノ構造解明

代表者・杉岡 奈穂子　若手研究（B）継続

本研究は、文化財の材料科学的研究、特に、先端科学技術を導入して材料のナノ構造まであきらかにし、製作技法あるいは彩色効果等の成果から、文化財の保存修復あるいは活用に有用な情報を得ることを大きな目的としている。奈良時代の彩色材料について調査を進めており、緑色、青色、赤色、黄色、褐色、灰色等について顔料および染料の使用について微細構造観察から検討をおこなってきた。彩色構造は、木材、繊維、あるいは、漆・膠等の固着剤を含めた様々な物質で作られている微細な複合構造を成していることがあきらかになり、顔料等から検出される微量成分の分布についても解明されつつある。このような成果の積み重ねにより、奈良時代を中心とした彩色材料あるいは制作技法等の全容があきらかになると思われる。

◆シルクロード天山北路の形成過程に関する考古学的研究

代表者・山藤 正敏　若手研究　継続

本研究は、キルギス共和国北部に位置するチュー渓谷西部にて精細な考古学踏査を実施し、シルクロード天山北路の形成過程をあきらかにすることを目的にしている。

研究３年度である2020年度は、調査範囲（東西35km×南北50km）の北東部で調査を実施する予定であった。しかし、新型コロナウイルス感染症拡大による海外渡航制限のため、現地調査を実施できなかった。このため、2020年度は2019年度までに収集したデータを整理・分析し、新たな知見を得ることに努めた。2021年度は、調査範囲北東部および南部において現地調査を実施する予定である。

◆アンコール王朝の終焉と陶磁器需要の変容に関する考古学的研究

代表者・佐藤 由似　若手研究　継続

本研究は、カンボジア史の中でも衰退の時代と位置づけられてきたアンコール王朝末期からポスト・アンコール期にかけての王都出土遺物の調査をもとに、当時の社会・経済・宗教的変容について検討を試みるものである。最終年度にあたる2020年度は、本来ならば現地調査をおこなう予定であったがそれが叶わなかった。そのため、これまでに収集したデータ整理ならびに長崎・平戸における出土遺物調査を進め、当該期カンボジア・日本間の貿易関連調査に努めたが、2021年度まで研究期間を延長する予定である。

◆発掘後の劣化特性の予測技術に基づく出土鉄製文化財の新たな保存管理システムの構築

代表者・柳田 明進　若手研究　継続

本研究は鉄製文化財が出土した遺跡の埋蔵環境から、鉄製文化財の保管・展示環境下でのさらなる劣化進行の有無を予測し、それを未然に防ぐべく個々の鉄製文化財に応じた適切な保存・展示環境の提案を可能とすることを目的としている。最終年度に当たる2020年度は室内実験による埋蔵時の腐食メカニズムの検討に加えて、出土鉄製遺物のX線CT撮影を実施した。X線CT像の画像解析から、腐食層の厚さや、金属鉄の減肉状況を分析することで、鉄製遺物の塩化物塩集積の状況を検討した。

◆昭和初期における歴史的建造物保存修理の構造補強体系の構築

代表者・前川 歩　若手研究　継続

本研究では、昭和初頭から20年代頃までの古建築修理に、構造エンジニアがどのように介入し、受容され、どのような特質をもつのかをあきらかにし、歴史的建造物の保存修理において、その根幹をなす「構造補強」という行為を再考するための新たな枠組みを構築することを目的とする。

３年目となる2020年度は、戦後において実施された（昭和20年代、昭和30年代）修理工事おいて、重要文化財建造物修理報告書から構造補強に関わる項目を収集、整理をおこない、構造項目について分析をおこなった。

◆墨書木製品の分類を手がかりとした日本における木簡利用全史の解明

代表者・藤間 温子　若手研究　継続

本研究は、墨書木製品の分類を手がかりに、時代によって変化していった日本人と木簡との関係をあきらかにすることを目的としている。雑多な墨書木製品を分類するためには、時代が降るにつれて増加する墨書木製品の用途を見極めることが必要である。そのために、既刊報告書等に記載の出土例、文献資料、伝世品の調査等から用例の収集をおこなう。

２年目となる2020年度は、前年度から継続して、全国での出土事例の収集・整理作業をおこなった。そのほか、江戸時代の実用書重宝記から資料収集を進めた。

◆古代壁画の制作技法の伝習に関する研究―シルクロード近隣地域と日本の壁画を中心に

代表者・中田 愛乃　若手研究　継続

本研究では、シルクロード近隣地域に位置する古代壁画にて使用された技法および材料を調査し、比較することで、壁画の制作技法がどのような経路で日本へ伝習したのかを考察することを目的とする。

2020年度は主に、中国の敦煌莫高窟壁画（北涼から唐にかけて）および西安近郊に位置する唐時代の墓室壁画を中心に、図録や文献を用いた資料調査を進めてきた。

本来であれば国内外での現地調査を予定していたが、新型コロナウイルス感染症の世界的流行を受け、海外への渡航は断念した。2020年度に見送った調査地については、次年度以降の調査に組み込む予定である。

◆文化的景観における棚田集落の相対的価値の解明にむけた比較研究

代表者・惠谷 浩子　若手研究　継続

本研究は、宅地や山林等も含めた棚田集落全体に着目し、[自然条件]、[空間構造]、[生業のシステム]の比較研究を通じて、棚田集落の「典型性」と「独特性」を示すポイントを整理・分析し、相対的な価値評価の基礎とすることを目的とする。

2020年度は、コロナ禍のため遠方の調査を控え、棚田集落に関する情報収集をすすめつつ、奈良県明日香村にて詳細調査を実施した。

◆石造物からみるブリテン島における古代と初期中世の境界

代表者・岩永 玲　若手研究　新規

本研究は、ブリテン島の初期中世における石造物製作技術の系譜をあきらかにすることを目的とする。

１年目である2020年度は、新型コロナウイルス感染症の影響により予定していたイギリスでの資料調査を延期し、報告書をもとにイングランド北部の古代・初期中世の石造物に関するデータ収集をおこなった。また、ヨークミンスター南翼廊下から出土した共通の獣文を持つ初期中世の石造物群の編年と製作技術について、論考にまとめた。

◆西日本集落遺跡の分析に基づく古代地域社会の実証的研究

代表者・道上 祥武　若手研究　新規

本研究では、古墳時代から飛鳥・奈良時代の西日本集落遺跡の集成・分析作業を基礎に、古代集落像の具体的復元をおこなう。また、集落消長や分布にみられる汎地域的な変動の把握を通して、古代国家形成期における社会構造の変容と画期の解明を試みる。

初年度にあたる2020年度は、畿内地域および周辺地域の集落遺跡の集成・整理作業を進めた。また、集落構造解明に向けた古代集落遺跡の具体的分析作業を進めた。以上の成果について、第24回古代官衙・集落研究会「古代集落の構造と変遷」（古代集落を考える１）において口頭発表をおこなった。

◆飲食物表現からみた古代東アジアにおける古墳葬送儀礼の考古学的研究

代表者・松永 悦枝　若手研究　新規

本研究は、食物表現が葬送儀礼のなかでどのように表現されてきたのか、古墳に副葬された土器や食物をかたどった土製模造品の分析を通して、古代東アジア古墳の飲食儀礼の実態とその歴史的背景についての解明を試みるものである。日韓の古墳に着目し、両国の地域性や階層性による、共通性と相違性を明確に示すことで、各墓制の特質をあきらかにし、相互の歴史関係を復元することを目的とする。

初年度となる2020年度は、これまで収集してきた資料の再整理・再検討を進め、論考としてその成果を発表した。また、日韓古墳出土動植物遺体に関するデータベース作成の準備をおこなった。

◆群青の緑青化が起こる環境的要因の検証

代表者・荻山 琴美　若手研究　新規

本研究は、青色の顔料である群青が緑色へ変化する現象「群青の緑青化」の要因が資料の置かれる保管環境にあると予測し、その環境要因の解明を目的としている。当現象は日本において事例や研究報告が少ないため、群青の緑青化が確認されている文化財を対象に環境調査をおこない、条件検討のために実験を進める。

初年度となる2020年度は、国内外の先行研究の文献調査と翻訳作業を進めた。また、奈良県内の仏像を対象に彩色調査（可視分光分析・実体顕微鏡観察）を実施した。

◆文化財修理に用いられる和紙の膨潤収縮挙動

代表者・金 旻貞　若手研究 新規

本研究は、装潢文化財（書画文化財）の修理に使用されていた手漉き和紙（以下、「和紙」という）を調査対象として、修理時に水を使用する影響で繊維と水との吸着と吸収が同時に発生し、和紙がシート伸縮することをあきらかにし、対策方法について検証することを目的としている。

2020 年度は和紙の変遷、および地域による和紙の特徴等を考慮しながら和紙の資料を収集し、和紙の特性について JIS 法に準じてデータベースを構築した。成果の一部は、日本文化財科学会第37 回大会で発表した。

◆出土木製遺物の保存処理の飛躍的効率化を実現する溶媒蒸発を用いた薬剤含浸技術の確立

代表者・松田 和貴　若手研究　新規

遺跡出土木製遺物の保存処理では、薬剤の含浸に長い期間を要するため、その効率化が長年の課題とされてきた。本研究は、従来の手法とは異なる原理を利用し、より迅速な薬剤含浸を実現する新たな手法の開発を目指すものである。

2020年度は、種々の処理条件が試料の寸法安定性に及ぼす影響を検討する予備的な

実験に着手した。含浸工程における溶液の粘度や環境の温湿度等の推移をモニタリングし、溶媒を制御的に蒸発させることで、難含浸性の樹種についても、良好に保存処理を実施できる可能性が示唆された。

◆考古系展示施設における観覧行動分析とそれに基づく多様な「学び」の構築と実践
代表者・廣瀬 智子　若手研究　新規

本研究は、考古資料の展示手法が施設利用者の理解にどう影響を及ぼしているのか、利用者の観覧行動の分析を通じて、考古資料の展示活用の現状を把握し、利用者のニーズに応じた「学び」を再考することを目的とする。2020年度は、フィールドとする平城宮いざない館、平城宮跡資料館にて、来館者行動調査を計８日間実施し、基礎データの収集・整理と、対象者の全体傾向について分析した。2021年度以降は、児童・シニア等の年齢別や、観光・教育旅行等の目的に応じた、より詳細な観覧動線の傾向分析を進めるとともに、2020年度得られた全体傾向と比較するため、対象とする層を絞った調査を実施する予定である。また、他施設における教育普及の事例収集・整理にも併行して取り組む。

◆越後大工・小黒杢右衛門一族の作風―近世在方大工の作家論的研究
代表者・目黒 新悟　若手研究　新規

小黒杢右衛門一族は、初代～七代が「杢右衛門」を襲名し、近世越後の主要な建物を造営した越後大工として知られる。建築作品の一例として、五代による重要文化財旧笹川家住宅がある。本研究は、五代を含む歴代の小黒杢右衛門一族による建築作品の特徴と変遷・系譜をあきらかにすることを目的とする。

初年度にあたる2020年度は、以下の点から研究を進めた。①建築作品に関する指図や古文書・古記録の調査・検討。②建築作品の存否や分布の調査・検討。③数例の建築作品の個別調査。これらの成果の一部は、2021年度日本建築学会北陸支部大会で発表予定である。

◆『築山庭造伝』前編・後編にみる作庭技術とその流布に関する基礎的研究
代表者・高橋 知奈津　若手研究　新規

本研究は、江戸時代後期に出版された『築山庭造伝（前編・後編）』に記載された内容から、近世の造園技術や意匠的な特徴について分析するとともに、書誌学的・技術史上の意義を検討し、江戸時代後期の庭園の展開をあきらかにすることを目的とする。

2020年度は、当該史料および同時代に刊行された造園古書の読解を進め、当該史料の特質について検討をおこなった。

◆セット論・生産流通論からみた古代国家成立期の馬装体系の変化に関する研究
代表者・片山 健太郎　研究活動スタート支援　継続

本研究はいわゆる「毛彫馬具」のセット等、古墳時代終末期の馬具を主要な対象として、生産、使用の実態の解明を目指すものである。

一年継続延長し、最終年度となる2020年度は、2019年度に引き続き、愛知県豊橋市上向嶋２号墳出土馬具、同市口明南塚古墳出土馬具、京都府与謝野町千原２号墳出土馬具の資料調査をおこなった。また、飛鳥・藤原地域出土の毛彫馬具等についても今後刊行予定の『紀要』での報告のための準備を進めた。

◆埴輪生産からみた古墳時代労働力編成システムに関する考古学的研究
代表者・木村 理　研究活動スタート支援　新規

本研究は、５世紀における埴輪の考古学的分析から中・小型古墳の、大型古墳の埴輪生産への組み込まれ方、およびその際に設けられる生産組織編成の質的差異をあきらかにし、古墳造営時にとられた労働力の編成・差配方式の実態に迫るものである。

2020年度は、出土埴輪の効果的な図化・分析が期待される三次元計測の方法論的な整備や、分析対象資料の網羅的な集成、岡山県域への資料調査を実施した。2021年度は百舌鳥・古市古墳群をはじめとした王権中枢地域での詳細な分析に着手し、小型古墳の生産に携わった生産組織の規模、および器種別分業の実相解明を試みる予定である。

◆植物考古学から探るイネ、雑穀、ムギ食文化の交流と変容
代表者・庄田 慎矢　学術変革領域研究（A）　新規

本研究は、新石器時代から青銅器時代にかけて異なる穀物文化圏（イネ、雑穀、ムギ食文化）が交錯し、邂逅した中央アジア・東アジアの諸遺跡を対象とする。これらの遺跡から出土した人工／自然遺物を対象に、土器残存脂質分析、穀物の種子サイズ分析、プロテオミクス解析、パレオゲノミクス解析、土器圧痕種実分析等をおこない、これらの分析結果を民族植物学的調査や文献史料からの知見と合わせて各地域における穀物利用のあり方や食文化の中での位置づけとその変容をあきらかにしようとする。初年度である2020年度には、EA-IRMSを用いた塊状炭化物の炭素・窒素安定同位体比分析、GC-MSを用いた土器残存脂質の生物指標・異性体比分析、PyGC-MSを用いた歯石の残存脂質分析、GC-c-IRMSを用いた個別脂質の炭素安定炭素同位体比分析等を中央アジアの試料に対しておこなうとともに、プロテオミクス・ゲノミクスの手法を日本出土炭化種子に適用する等、多面的な分析研究を展開した。

◆中央アジアにおける後期旧石器時代初頭（IUP）石器群の探求
代表者・国武 貞克　新学術領域研究　継続

中央アジア西部におけるIUP石器群を追求するために2019年に発掘調査を実施したカザフスタン南部のカラタウ山地のチョーカン・バリハノフ遺跡のうち最下層で石刃石器群が検出された第８～９文化層の土層堆積を検討するために土壌微細形態分析を実施した。またチョーカン・バリハノフ遺跡の第６～10文化層までのOSL年代分析と第10文化層の炉跡出土の炭化材の放射性炭素年代分析を実施し、IUP期末期の年代値が得られた。2019年にタジキスタンで発掘調査をしたフッジ遺跡の研究成果とあわせて、本研究が目標とする中央アジアにおける初期後期旧石器文化の新資料を把握することができた。列島最古の石刃石器群が期待される長野県佐久市香坂山遺跡の第３次発掘調査を実施した。これにより、フッジ遺跡等中央アジア西部のIUP石器群と酷似する大型石刃石器群を検出することができた。香坂山遺跡の火山灰および古環境分析を実施した。また出土炭化材の樹種同定と放射性炭素年代分析もセットで行い、３万７千年前後遺跡形成時における植生復元や木材利用について貴重な新データを得た。これらについて、成果を報告書にとりまとめた。出版は2021年度の予定である。

◆3D石器形態系統分類学による日本列島およびサフル大陸における人類進出の解明
代表者・野口 淳　新学術領域研究（研究領域提案型）新規

ユーラシア大陸から日本列島およびサフル大陸への人類の移住と石器技術の変化を理解するために、3D計測による石斧と関連石器群の形態分析をおこなう。

2020年度は日本国内の資料のうち計測実施済みの宮崎県山田遺跡等のデータ解析を実施した。オーストラリア、ベトナムの資料分析は新型コロナウイルス感染症の影響により延期せざるを得なかった。オンラインでのデータ、情報の交換を含めて今後

可能な取り組みを検討する。参加予定だった国際学会も中止、延期となったが、インドにおいてホストされたウェビナーで２件の講演発表をおこなった。

◆植物遺体群調査解析システムの新構築による古代都城の植物資源利用と集落生態系の解明

代表者・上中 央子　特別研究員奨励費 継続

藤原京・平城京を中心とした発掘調査で出土する植物遺体群や堆積物中の花粉をはじめとする微化石群の情報を最大限に引き出すための新たな複合的解析システムを構築し、古代都城の人の生活を支えた植物資源の視点から、その背景にある集落生態系の特徴をあきらかにすることを目的とする。2020年度は、おもに既存成果報告の集成による植物遺体群データの再検討・再解釈と、2019年度の飛鳥藤原第198次調査で得られた試料の花粉分析を進めた。また、埋蔵文化財ニュース184号「花粉分析からみた都城造営と植生変化」の編集・執筆をおこなった。

◆全国遺跡報告総覧

代表者・高田 祐一　研究成果公開促進費 新規

目的は、過去に発行された全国の遺跡発掘調査報告書の目録を作成し、報告書情報の流通改善を図ることである。奈文研は報告書を全文電子化しインターネット上で検索・閲覧できるようにしたデータベース「全国遺跡報告総覧」を公開している。本データベースは、すべての報告書のデータ公開を目標としている。2020年度には、登録書誌数が前年度比19,298件増加し、88,067件となった。

◆奈良の都の木簡に会いに行こう！ 2020

代表者・馬場 基　研究成果公開促進費（ひらめき☆ときめきサイエンス）新規

2020年８月12日（水）～14日（金）の３日間（うち12・13日は小学生向け、14日は中学生向け）、「奈良の都の木簡に会いに行こう！ 2020」を実施した。新型コロナウイルス対策のため、人数を限定し、また机・会場の配置等も工夫を凝らしながらの実施となった。参加者は、12日３名、13日８名、14日８名。

木簡の解説や現物の観察、洗浄作業、古代食の実食の他、最新の研究成果を踏まえての木簡への文字の書き込み等をおこない、現物資料の取り扱いから研究までを身をもって体験してもらった。

学会・研究会等の活動

◆東アジア木造建築史研究会

2020年11月21日

Zoomによるオンライン方式において、第４回東アジア木造建築史研究会を開催した（参加者50名）。東アジア木造建築史の構築を目的とした国際研究会である。プログラムは以下の通りである。

司会：鈴木智大（奈文研）

通訳（日中）：唐聡（重慶大学）、兪莉娜（北京大学）

Session 1　日本、発表：鈴木智大「19世紀の日本における建築図面の使用法」、

Session 2　中国、発表：孫毅華（中国・元・敦煌研究院）「敦煌の唐代壁画にみられる２種類の垂脊頭瓦飾りの変遷と名称に関する考察」

講評：韓志晩（韓国・明知大学校）、丁垚（中国・天津大学）

本会は当初2020年２月に中国・敦煌において開催を予定していたが、新型コロナウイルス感染症の拡大の影響を受け、延期し、オンラインによる開催に切り替えて実施した。オンライン開催としたことで、これまでより多くの国内外の研究者に参加いただけたことは収穫であった。

なお、本研究会はJSPS科研費16H06113（研究代表者：鈴木智大、連携研究者：韓志晩、丁垚、李暉）、16K14369（研究代表者：鈴木智大、研究分担者：李暉）の成果の一部である。　（鈴木 智大）

◆木簡学会研究集会

2020年12月５日

第42回木簡学会総会・研究集会を、オンラインにて開催した。

山本祥隆「2020年全国出土の木簡」の事例報告の他、尹在碩氏（慶北大学校人文学術院）「東アジア木簡記録文化圏の研究紹介―慶北大学校人文韓国事業団の研究方向を中心に―」、畑野吉則「木簡等の研究資源オープンデータ化の概要と現状」の２本の研究報告があり、その後 総合討論があった。

初のオンライン開催であり、試行錯誤の部分も多かったが、充実した報告を得、活発な議論が展開され、実りの多い研究集会とすることができた。

なお、会誌『木簡研究』第42号を編集・刊行した。　（馬場　基）

国が実施する事業等についての調査・協力

●平城宮・京跡の整備と情報発信

例年同様、国土交通省や文化庁による各種事業に対して、調査研究・協力・専門的見地からの助言等をおこなった。

国土交通省による大極殿院南門の復原工事は、2020年度には工事が終盤にさしかかり、工事の節目ごとに写真室職員による写真撮影をおこない、事業者間での写真の共有化を図った。2019年度に2回おこなった復原工事現場の特別公開は、コロナ禍のため中止せざるをえなかった。また毎月2回の工事関係者による定例会議に出席し、情報の共有と各種課題に対応した。

2010年から進めている第一次大極殿院の復原研究は、都城発掘調査部遺構研究室を中心に、これまでの調査・研究の報告書作成を継続しておこなった。2021年度に出版の予定である。

企画調整部では、第一次大極殿院建造物復原整備事業に関わる情報発信の一環として、都城発掘調査部と協力して、平城宮跡歴史公園第一次大極殿院南門復原整備工事記念特別展「鬼神乱舞　―護る・祓う・鬼瓦の世界―」を企画し、国営飛鳥歴史公園事務所（共催）とともに、平城宮いざない館にて令和3年1月23日～3月28日の会期で開催した。会期中、都城発掘調査部考古第3研究室の研究員による講演会を2回開催した。展覧会は大変好評で、会期中、31,530名の入館者があった。

なお、平城宮いざない館の活動については、2018年の開館以来、第4展示室の展示の学芸業務を中心に、国土交通省国営飛鳥歴史公園ならびに管理センターへの協力をおこなっており、これを2020年度も継続した。

このほか、文化庁がおこなう平城宮跡の整備管理業務、歴史的環境維持業務等について、助言をおこなうとともに、現地において調整・対応した。　（箱崎 和久）

●高松塚古墳壁画の保存のための調査研究

国営飛鳥歴史公園内に設置された仮設修理施設において、高松塚古墳壁画の現状を把握するとともに材料に関する知見を得るために、2020年度は石材、漆喰および彩色に関する調査研究を以下の通りおこなった。新たな保存活用のための施設が整備された後に、現在の仮設修理施設からの石材の輸送手法を検討することを目的として、現在石材を固定しているフレームで石材を移動した際に発生する加速度、変位量およびフレームのひずみ量を計測した。また石室を構成する石材と漆喰の物理的性質として、二上山産出の凝灰岩試料および高松塚古墳の目地漆喰を用いて平衡含水率を測定するとともに、凝灰岩試料については各平衡含水状態における引張強度の測定をおこなった。

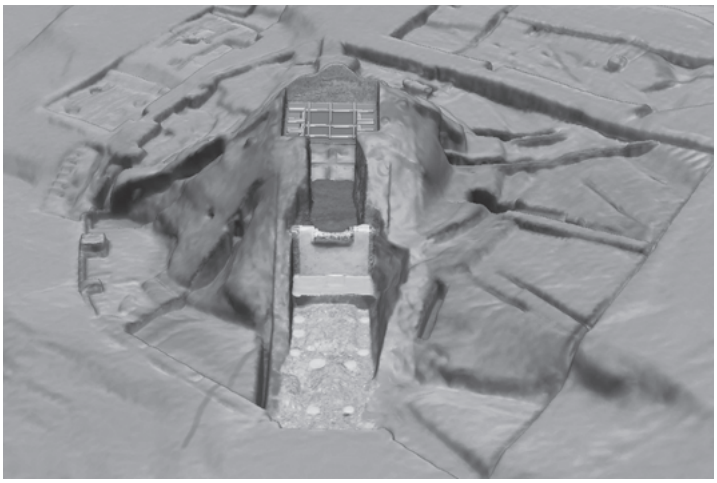
高松塚古墳の歴史的価値の普及啓発に資するため、高松塚古墳周辺の飛鳥の諸古墳を配置した周辺地形の詳細三次元モデルに高松塚古墳構築過程再現モデルを統合し、築造時の高松塚古墳と周辺古墳との関係を視覚的に再現するモデルを作成した。また、飛鳥資料館が所蔵する1972年度調査出土品（重要文化財）のうち、刀装具について高精度の三次元計測を実施し、三次元モデルと図面化のための下図を作成した。

壁画の経年変化を把握するための記録撮影をおこなうとともに、壁画材料の科学調査として、可視分光分析、テラヘルツ波イメージング、デジタルアーカイブスキャニング（赤外線、可視光線）を実施した。壁画の色料を調査するために開発したX線回折分析装置を実際の高松塚古墳壁画の分析に適用するための基礎実験として、漆喰下地に様々な顔料を塗布した手板試料の測定をおこなった。

高松塚古墳壁画の保存・活用に資するため、熊本県和水町に位置する江田船山古墳および塚坊主古墳の石室内環境および周辺環境の現地視察をおこなった。また、大分県日田市に位置するガランドヤ古墳群のうち1号墳および2号墳において温熱環境調査を実施した。

高松塚古墳壁画仮設修理施設において、壁画保管室等の保管環境の管理、壁画の状態観察をおこなうとともに、文化庁と連携して年間3回（2020年5月に予定されていた第29回一般公開については新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止となった）の仮設修理施設の一般公開において研究員を派遣し、高松塚古墳壁画に関する解説をおこなった。　（脇谷 草一郎）

「鬼神乱舞」展のポスター



高松塚古墳発掘調査状況三次元モデル（文化庁事業報告より）

●キトラ古墳に関する調査研究

遺物に関する事業では、石室内より出土した木棺漆膜について、適切な保存処理を実施するため、事前に撮影したX線CT画像等を参考に破片の取り外しを進めたほか、人骨・歯牙等の整理をおこなった。

発掘調査成果の整理および活用に関する事業では、2002年度に実施したキトラ古墳墓道部の発掘調査区について、三次元モデルを作成した。

壁画の安定化に関する事業では、X線回折装置および分光分析装置を用い、キトラ古墳壁画の色料の分析調査を実施した。また、壁画の状態変化の有無を評価するため、高精細カメラによる撮影に加え、SfM/MVS技術を応用した記録作成の検討をおこなった。

文化庁壁画保存管理施設では、研究員が常駐して日常的な管理運営等をおこなうとともに、壁画や出土遺物レプリカ等を展示し、壁画の解説映像の製作・上映をおこなった。壁画公開にあわせ、移動式のミニプラネタリウムを設置し投影するイベントを開催した。また、英語、中国語（簡体字・繁体字）、韓国語の解説パンフレット等を作成し外国語対応を充実させた。

壁画非公開期間においても展示室の公開をおこない、石室模型、中国の天文図拓本等を展示し、年末年始期間にはお正月展示「キトラ古墳壁画の十二支」を開催した。また、歩行性昆虫や環境カビの調査と温湿度調査等を実施した。なお、2020年度は新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から4月1日～6月14日を臨時閉室とし、この期間に予定されていた公開事業を中止した。

古墳の整備活用に関する事業では、墳丘全体の植栽の育成状況について、経過観察をおこなった。当初予定していた乾拓体験会は、新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から中止した。

このほか、キトラ古墳天井壁画が2020年3月17日に日本天文学会によって日本天文遺産に認定されたことを記念し、天文図のポストカードを作成し、壁画公開参加者等に配布した。（清野 孝之）

現地説明会

※新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、大勢の人を集めてパネル等を使用して説明する「現地説明会」ではなく長時間の解説はせず、自由見学形式の「現地見学会」とした。

◆2020年9月28日（月）

平城第625次調査（興福寺鐘楼地区）
発掘調査現地見学会
　都城発掘調査部（平城地区）
　主任研究員　森先 一貴
　参加者　606人　　調査面積345㎡

◆2020年11月7日（土）

飛鳥藤原第205次調査（藤原宮大極殿院）
発掘調査現地見学会
　都城発掘調査部（飛鳥・藤原地区）
　主任研究員　若杉 智宏
　参加者　480人　　調査面積1,505㎡

多言語で作成したキトラ古墳壁画公開パンフレット類

飛鳥藤原第205次調査　現地見学会の様子

2 研修・指導と教育

文化財担当者研修と指導

文化財の保存・活用を推進し、国民への良質なサービスの提供を図るため、地方公共団体等の文化財担当職員の資質向上を目的とする研修を実施している。2020年度は、新型コロナウイルス感染症拡大の影響で、当初は15課程を予定していたが、専門研修4課程のみの開催となった。(2020年度文化財担当者研修課程の一覧参照)。研修は、講義形式が主体であるが、実地踏査や実技・実習を取り入れた研修が好評であった。研修総日数19日、研修生総数32名であった。

各部・センターでは、地方公共団体や関係機関が実施する発掘調査、出土遺物の保存処理、遺構の保存、遺構整備等に関して、要請にしたがって指導および助言等の協力をおこなっている(2020年度の主な協力について一覧を別表に掲載)。このほか、文化庁、地方公共団体、関係機関からの依頼を受けて、発掘調査をはじめ、遺跡・遺物の保存、遺跡の整備および公開に関する調査、地下遺構の遺跡探査、動物遺存体分析、年輪年代測定等の共同研究や受託研究も進めている。

2020年度　文化財担当者専門研修課程一覧

区分	課　程	実施期日	定員	対象	内容	担当室	研修日数	応募者数	受講者数
	自然科学分析外注課程	9月24日～9月25日	10名まで	地方公共団体の文化財担当職員で地域の中核となる者若しくはこれに準ずる者	動植物遺体等の自然科学分析を外注する際に必要な基礎知識の習得や留意点の理解を目的とする研修。	環境考古学研究室	2日	11名	10名
	文化的景観調査計画課程	9月28日～10月2日	10名まで	〃	文化的景観の保護にこれから取り組む担当者を対象に、文化的景観の歴史・概念、保護制度、調査手法および保存計画立案等についての基礎知識を習得することを目的とする研修。	景観研究室	5日	5名	5名
	保存科学Ⅰ(金属製遺物)課程	10月13日～10月21日	8名まで	〃	本研修では、金属製遺物の保存処理を実施または外注する際の方法や仕様の選定、ならびに金属製遺物の展示・保管環境の調整といった、現場での実務をおこなう上で必要な知識および技術について、実習を交えながら学ぶ。	保存修復科学研究室	7日	14名	8名
	地質・考古調査課程	10月26日～10月30日	10名まで	〃	地質や探査・計測、動植物遺存体について、基礎知識や調査法等、知っていれば発掘調査の現場で役に立つ実践的な基礎技術の習得や、発掘調査に求められる多分野協業の視点について実習を交えながら学ぶ。	遺跡・調査技術研究室	5日	27名	9名

※当初15課程を予定していたが、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、感染者数が比較的少なかった9月から10月の間、4課程のみ開催した。

2020年度　日本各地の遺跡・建造物等に関する指導・協力一覧(委員の委嘱を受けているもの)

(北海道) 上之国館跡
(青森) 三内丸山遺跡
(岩手) 鳥海柵跡
(宮城) 多賀城跡
(秋田) 横手市伝統的建造物群　脇本城跡　払田柵跡　横手市歴史文化遺産
(福島) 上人檀廃寺跡
(茨城) 新治廃寺跡
(群馬) 上野国佐位郡正倉跡
(千葉) 墨古沢遺跡
(神奈川) 橘樹官衙遺跡群
(新潟) 歴史の道八十里越
(石川) 金沢城　真脇遺跡
(福井) 朝倉氏遺跡　兜山古墳　金ヶ崎城跡　柴田氏庭園　興道寺廃寺跡　若狭町伝統的建造物群　小浜藩松ヶ瀬台場跡
(長野) 上田城跡
(岐阜) 岐阜城跡
(静岡) 新居関跡　遠江国分寺跡　片山廃寺跡　江戸城石垣石丁場跡
(愛知) 島原藩主深溝松平家墓所　三河国分寺跡　断夫山古墳
(三重) 旧賓日館　諸戸氏庭園
(滋賀) 敏満寺石仏谷墓跡　胡宮神社社務所庭園　永原御殿跡　清滝寺京極家墓所
(京都) 宇治川太閤堤跡　浄瑠璃寺庭園　恭仁宮跡　高麗寺跡　宇治市名勝　京都市美観風致　和東町文化的景観　宇治茶文化的景観
(大阪) 百済寺跡　日根荘遺跡　飯盛城跡　池上曽根遺跡　二子塚古墳　難波宮跡　旧西尾家住宅　新堂廃寺等　西山氏庭園　狭山池　八尾市文化財　八尾市史跡
(兵庫) 赤穂城跡　石の宝殿および竜山石採石遺跡　福本遺跡　山陽道野磨駅家跡
(奈良) 春日古墳　上牧久渡古墳群　市尾墓山古墳・宮塚古墳　山田寺跡　旧大乗院庭園　法隆寺金堂壁画　唐招提寺旧境内　東大寺境内　東大寺東塔跡　薬師寺東塔　奈良公園　橿原市伝統的建造物群　五條市伝統的建造物群　宇陀市松山地区伝統的建造物群　明日香村文化的景観
(鳥取) 大御堂廃寺跡　若桜町伝統的建造物群　因幡国古代山陰道　妻木晩田遺跡　青谷上寺地遺跡　鳥取市歴史文化基本構想
(島根) 荒神谷遺跡　三瓶小豆原埋没林　田和山遺跡　石見銀山遺跡　出雲国府跡
(岡山) 吉岡銅山関連遺跡　山陽遺跡　矢掛町伝統的建造物群
(広島) 旧中島地区被爆遺構　毛利氏城跡　広島平和記念資料館
(山口) 周防鋳銭司跡　周防国府跡等官衙遺跡　恵美須ヶ鼻造船所跡　大板山たたら製鉄遺跡
(徳島) 勝瑞城館跡　板東俘虜収容所跡　美馬市景観
(香川) 快天山古墳　丸亀城跡　讃岐国府跡
(高知) 土佐国分寺跡
(福岡) 大宰府史跡　大宰府跡推定客館地区　鴻臚館跡
(佐賀) 肥前陶器窯跡　三重津海軍所跡
(長崎) 鷹島海底遺跡
(熊本) 棚底城　大野窟古墳　今城大塚古墳
(大分) 長者屋敷官衙遺跡　元町石仏　法鏡寺廃寺跡　納池公園　史跡ガランドヤ古墳
(宮崎) 日向国府跡　蓮ケ池横穴群
(鹿児島) 下原洞穴遺跡

地方公共団体の文化財保護審議員等に係る遺跡等は除く

京都大学（大学院）との連携教育

京都大学大学院人間・環境学研究科共生文明学専攻文化・地域環境論講座文化遺産学分野の客員教員として玉田芳英（考古学）、髙妻洋成（保存科学）、馬場基（史料学）、山崎健（環境考古学）の４名がそれぞれの講義、演習および実習をおこなうとともに、文化遺産学分野を専攻する院生に対して必要に応じて奈良文化財研究所において研究指導をおこなった。

2020年度には、修士課程４名、博士後期課程７名を受け入れ、研究指導をおこなった。

奈良女子大学（大学院）との連携協力

奈良女子大学大学院人間文化研究科比較文化学専攻文化史論講座の客員教員として、今井晃樹が「文化財学の諸問題Ⅰ・Ⅱ」、神野恵が「歴史考古学特論Ⅰ・Ⅱ」、桑田訓也が「歴史資料論Ⅰ・Ⅱ」を担当し、博士後期課程の大学院生への研究指導をおこなった。

いずれも実際の遺物をみながらの演習形式の授業を中心とするため、年度当初は新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から授業を実施できなかったが、６月以降は感染症対策に最大限の配慮をした上で対面での授業も可能となった。平城宮・京跡等の発掘調査で出土した遺物を観察しながら、出土遺跡の検討や東アジアを視野に入れた比較研究等、実地の調査研究に密着した講義・演習をおこない、通常の大学院における授業では経験することのできない、奈良文化財研究所ならではの、特色ある教育を実践することができた。

奈良大学への教育協力

2012年の「奈良大学に対する奈良文化財研究所の教育協力に関する協定書」に基づき、2020年度は後期に文化財修景学に内田和伸・中島義晴・前川歩が出講した。新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から15回の講義は主としてオンデマンドでおこなった。講義内容は、史跡等整備に関する歴史・理念・事業の流れ・技術の体系、平城宮跡隣地講義、名勝の保存と活用、文化的景観の調査と活用、建造物・伝統的建造物群の保存と活用、史跡等を活かしたまちづくりと観光であった。

保存科学Ⅰ（金属製遺物）課程の実習風景

地質・考古調査課程の講義風景

3 展示と公開

飛鳥資料館の展示

◆特別展「飛鳥の石造文化と石工」

2020年8月4日～9月22日

飛鳥には石人像、須弥山石等独特な石造物が点在している。飛鳥資料館庭園の複製品と館内展示の双方を使って、多彩な石造物や関連資料について展示した。また、庭園の石造物を製作した際の資料や石工の道具も展示し、古代から現代に続く石工の技を紹介した。会期中の入館者数3,212人。図録『飛鳥の石造文化と石工』刊行。

◆秋期企画展「第11回写真コンテスト作品展「飛鳥の祭」」

2020年10月16日～12月6日

「飛鳥の祭」をテーマに募集した65点の作品を会場に展示。四季折々におこなわれる飛鳥の祭の魅力をほりおこし、古代の都から農村へと移り変わった飛鳥の歴史と今を映し出した展示となった。審査と来館者投票による上位者を表彰した。会期中の入館者数5,114人。

◆冬期企画展「飛鳥の考古学2020」

2021年1月22日～3月14日

奈良県立橿原考古学研究所、明日香村教育委員会との共催。飛鳥藤原地域の2019年度の発掘調査成果と、飛鳥寺跡出土の風鐸等の調査成果を展示した。会期中の入館者数2,371人。図録『飛鳥の考古学2020』刊行。

※新型コロナウイルス感染症対策のため、4月1日～5月31日を臨時休館とし、展覧会の開催時期を調整して対応した。

平城宮跡資料館の展示

◆特別企画展「古代のいのり―疫病退散！」

2020年6月16日～7月19日

新型コロナウイルス感染症拡大を防止するための臨時休館（4月1日～5月31日）後、現在同様、疫病に襲われた奈良時代の平城京の人々が、いかに疫病に立ち向かったかを示す展覧会を急遽実施した。そこには、コロナ禍のもとで提唱された「新しい生活様式」につながるような奈良時代における新たな生活様式があったことも示された。また、ギャラリートーク等ができないことに対応して、展示解説の動画「研究員によるミニ解説 ～古代のいのり ―疫病退散！展～」を製作、あらたに設けられた「なぶんけんチャンネル」にアップした。会期中の入館者数2,846名。

◆夏期企画展「奈良の都の考古学―発掘された平城2019／古代のいのり ―疫病退散！」

2020年7月23日～8月30日

2020年の夏期企画展は2部構成とした。第1部は奈良の都の考古学と題して、新型コロナウイルス感染症の拡大のために中止した令和元年度冬期企画展「発掘された平城2019」を補充したうえで再開催したもの。第2部では、好評だった特別企画展「古代のいのり ―疫病退散！」を再開した。閉幕後、関連動画「ナゾの箱形土製品！」を製作、なぶんけんチャンネルにアップした。会期中の入館者数3,968名。

◆秋期特別展「地下の正倉院展―重要文化財 長屋王家木簡―」

2020年10月10日～11月23日

平城宮・京跡出土木簡の実物展示をおこなう秋の特別展示「地下の正倉院展」。今年は、2020年9月30日に長屋王家木簡1669点が国の重要文化財に指定されたことを記念した。木簡によって具体的に描かれる、奈良時代前半に政権の中枢を担った上級貴族である長屋王の豊かな暮らしぶりが注目された。会期中、展示替えごとにギャラリートークの代わりとなる動画「研究員による見どころ紹介！　地下の正倉院展 ―重要文化財 長屋王家木簡―」Ⅰ～Ⅲ期をなぶんけんチャンネルにアップした。会期中の入館者数14,670名。

※新春ミニ展示「平城京の丑」（2021年1月5日～1月31日の24日間・入館者数1,425名）を実施した。なお、企画調整部展示企画室では、都城発掘調査部とともに平城宮いざない館にて平城宮跡歴史公園第一次大極殿院南門復原整備工事記念特別展「鬼神乱舞 ―護る・祓う・鬼瓦の世界―」（奈良文化財研究所主催、国土交通省 国営飛鳥歴史公園管理事務所共催、2021年1月23日～3月28日の64日間、入館者数31,530名）を実施した。

秋期特別展『地下の正倉院展―重要文化財 長屋王家木簡―』展示会場

2020年度　入館者数

飛鳥資料館（有料）観覧料の詳細は69頁	平城宮跡資料館（無料）	合　　計
15,664人	37,913人	53,577人

解説ボランティア事業

平城宮跡解説ボランティア事業は、平城宮跡に来訪される方へ、平城宮跡の理解を深めていただけるよう平城宮跡資料館を中心に第一次大極殿、朱雀門、遺構展示館、東院庭園、平城宮いざない館の定点で案内解説をおこなっている。1999年10月から実施しているが、2020年度は、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため平城宮跡解説ボランティアによる解説を全て中止した。

なお、2020年度には新規ボランティアを追加募集し、2021年3月31日現在、解説ボランティアの登録数は152名である。

図書資料・データベースの公開

図書資料室では、文化財資料の中核的な拠点となるべく、歴史・考古学分野をはじめ、幅広く文化財関係の資料を収集している。また、新庁舎図書資料室においても一般公開施設として公開し、より快適な環境下で所外の研究者および一般の方々に図書・雑誌および展覧会カタログ等の閲覧・複写サービスをおこなっている。遠隔利用については、国立情報学研究所の提供するNACSIS-ILLを通じて図書の貸し出し、複写サービスをおこなっている。

また、奈文研の刊行物についても、主要なものについてはPDF化をおこない、学術情報リポジトリからインターネットを通じて公開している。

	公開データベース一覧	2020年度アクセス件数
1	史的文字データベース連携検索システム（Multi-database Search System for Historical Chinese Characters）	32,500
2	木簡庫（Wooden Tablet Database）	53,430
3	木簡庫（Wooden Tablet Database）（韓国語版　한국어）	607
4	木簡庫（Wooden Tablet Database）（中国語繁体字版　繁體中文）	485
5	木簡庫（Wooden Tablet Database）（中国語簡体字版　简体中文）	614
6	木簡庫（Wooden Tablet Database）（英語版　English）	1,582
7	木簡庫（Wooden Tablet Database）／電子くずし字字典データベース連携検索	61,875
8	木簡・くずし字解読システム-MOJIZO-	233,587
9	木簡人名データベース	*1
10	全国木簡出土遺跡・報告書データベース	2,892
11	和同開珎出土遺跡データベース	998
12	平城京出土陶硯データベース	1,756
13	3D Bone Atlas Database	*1
14	遺跡データベース	11,892
15	古代地方官衙関係遺跡データベース	1,420
16	古代寺院遺跡データベース	3,151
17	官衙関係遺跡整備データベース	123
18	古代地名検索システム	8,775
19	遺跡の斜面保護データベース	*1
20	発掘庭園データベース	881
21	Japanese Garden Dictionary	*1
22	薬師寺典籍文書データベース	990
23	大宮家文書データベース	856
24	所蔵図書データベース	19,800
25	報告書抄録データベース	3,015
26	全国遺跡報告総覧	13,706,663
27	文化財動画ライブラリー	*1
28	考古関連雑誌論文情報補完データベース	5,090
29	遺跡報告内論考データベース	982
30	学術情報リポジトリ	29,810

*1：アクセス数のカウントをしていない

4 その他

刊行物

奈良文化財研究所　学報

第１冊　仏師運慶の研究（1954）
第２冊　修学院離宮の復原的研究（1954）
第３冊　文化史論叢（1954）
第４冊　奈良時代僧房の研究（1957）
第５冊　飛鳥寺発掘調査報告（1958）
第６冊　中世庭園文化史（1959）
第７冊　興福寺食堂発掘調査報告（1959）
第８冊　文化史論叢Ⅰ（1960）
第９冊　川原寺発掘調査報告（1960）
第10冊　平城宮跡第一次・伝飛鳥板蓋宮跡発掘調査報告（1961）
第11冊　院の御所と御堂―院家建築の研究―（1962）
第12冊　巧匠安阿弥陀仏快慶（1962）
第13冊　寝殿造系庭園の立地的考察（1962）
第14冊　唐招提寺蔵「レース」と「金亀舎利塔」に関する研究（1962）
第15冊　平城宮発掘調査報告Ⅱ　官衙地域の調査（1962）
第16冊　平城宮発掘調査報告Ⅲ　内裏地域の調査（1963）
第17冊　平城宮発掘調査報告Ⅳ　官衙地域の調査２（1966）
第18冊　小堀遠州の作事（1966）
第19冊　藤原氏の氏家とその院家（1968）
第20冊　名物裂の成立（1970）
第21冊　研究論集Ⅰ（1972）
第22冊　研究論集Ⅱ（1974）
第23冊　平城宮発掘調査報告Ⅵ　平城京左京一条三坊の調査（1975）
第24冊　高山―町並調査報告―（1975）
第25冊　平城京左京三条二坊（1975）
第26冊　平城宮発掘調査報告Ⅶ　内裏北外郭の調査（1976）
第27冊　飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅰ（1976）
第28冊　研究論集Ⅲ（1976）
第29冊　木曽奈良井―町並調査報告―（1976）
第30冊　五條―町並調査の記録―（1977）
第31冊　飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅱ（1978）
第32冊　研究論集Ⅳ（1978）
第33冊　イタリア中部の一山岳集落における民家調査報告（1978）
第34冊　平城宮発掘調査報告Ⅸ　宮城門・大垣の調査（1978）
第35冊　研究論集Ⅴ（1979）
第36冊　平城宮整備調査報告Ⅰ（1979）
第37冊　飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅲ（1980）
第38冊　研究論集Ⅵ（1980）
第39冊　平城宮発掘調査報告Ⅹ　古墳時代Ⅰ（1981）
第40冊　平城宮発掘調査報告Ⅺ　第一次大極殿地域の調査（1982）
第41冊　研究論集Ⅶ（1984）
第42冊　平城宮発掘調査報告Ⅻ　馬寮地域の調査（1985）
第43冊　日本における近世民家（農家）の系統的発展（1985）
第44冊　平城京左京三条二坊六坪発掘調査報告（1986）
第45冊　薬師寺発掘調査報告（1987）
第46冊　平城京右京八条一坊十三・十四坪発掘調査報告書（1989）
第47冊　研究論集Ⅷ（1989）
第48冊　年輪に歴史を読む　―日本における古年輪学の成立―（1990）
第49冊　研究論集Ⅸ（1991）
第50冊　平城宮発掘調査報告書XIII　内裏の調査Ⅱ（1991）
第51冊　平城宮発掘調査報告書XIV　平城宮第二次大極殿院の調査（1993）
第52冊　西隆寺発掘調査報告書（1993）
第53冊　平城宮朱雀門の復原的研究（1994）
第54冊　平城京左京二条二坊・三条二坊発掘調査報告（1995）
第55冊　飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅳ　―飛鳥水落遺跡の調査―（1995）
第56冊　平城京左京七条一坊十五・十六坪発掘調査報告（1997）
第57冊　日本の信仰遺跡（1998）
第58冊　研究論集Ⅹ（1999）
第59冊　中世瓦の研究（2000）
第60冊　研究論集Ⅺ（2000）
第61冊　研究論集Ⅻ（2001）
第62冊　史跡頭塔発掘調査報告（2001）
第63冊　山田寺発掘調査報告　本文編　図版編（2002）
第64冊　研究論集XIII　中国古代の葬玉（2002）
第65冊　文化財論叢Ⅲ　奈良文化財研究所　創立五十周年記念論文集（2002）

第66冊　研究論集XIV
東アジアの古代都城（2003）
第67冊　平城京左京二条二坊十四坪発掘調査報告
旧石器時代編［法華寺南遺跡］（2003）
第68冊　吉備池廃寺発掘調査報告
百済大寺跡の調査（2003）
第69冊　平城宮発掘調査報告XV
東院庭園地区の調査（2003）
第70冊　平城宮発掘調査報告XVI
兵部省地区の調査（2005）
第71冊　飛鳥池遺跡発掘調査報告Ⅰ（2004）
第72冊　奈良山発掘調査報告Ⅰ
石のカラト古墳・音乗谷古墳の調査（2005）
第73冊　タニ窯跡A6号窯跡発掘調査報告（2005）
第74冊　古代庭園研究Ⅰ（2005）
第75冊　研究論集XV
中国古代の銅剣（2006）
第76冊　法隆寺若草伽藍跡発掘調査報告（2007）
第77冊　日韓文化財論集Ⅰ（2008）
第78冊　近世瓦の研究（2008）
第79冊　平城宮第一次大極殿の復原に関する研究１
基壇・礎石（2009）
第80冊　平城宮第一次大極殿の復原に関する研究４
瓦・屋根（2009）
第81冊　平城宮第一次大極殿の復原に関する研究２
木部（2010）
第82冊　平城宮第一次大極殿の復原に関する研究３
彩色・金具（2010）
第83冊　研究論集16
鉄製武器の流通と初期国家形成（2010）
第84冊　平城宮発掘調査報告XVII
第一次大極殿院地区の調査２　本文編／図版編（2011）
第85冊　漢長安城桂宮　報告編・論考編（2011）
第86冊　研究論集17
平安時代庭園の研究―古代庭園研究Ⅱ―（2011）
第87冊　日韓文化財論集Ⅱ（2011）
第88冊　西トップ遺跡調査報告
―アンコール文化遺産保護共同研究報告書―（2011）
第89冊　四万十川流域　文化的景観研究（2011）
第90冊　Western Prasat Top Site Survey Report on Joint Research for the Protection of the Angkor Historic Site（2012）
第91冊　朝暘地区隋唐墓の整理と研究（2012）
第92冊　文化財論叢Ⅳ　奈良文化財研究所　創立六十周年記念論文集（2012）
第93冊　奈良山発掘調査報告Ⅱ―歌姫西須恵器窯の調査―（2014）
第94冊　飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅴ―藤原京左京六条三坊の調査―（2017）
第95冊　日韓文化財論集Ⅲ（2015）
第96冊　研究論集18中世庭園の研究―鎌倉・室町時代―（2016）
第97冊　名勝旧大乗院庭園発掘調査報告書（2018）
第98冊　東アジア考古学論叢Ⅱ（2020）
第99冊　鞏義黄冶窯発掘調査報告　本文編・図版編（2021）
第100冊 日韓文化財論集Ⅳ（2021）

奈良文化財研究所　史料

第１冊　南無阿弥陀仏作善集（複製）（1955）
第２冊　西大寺叡尊伝記集成（1956）
第３冊　仁和寺史料 寺誌編Ⅰ（1964）
第４冊　俊乗房重源伝記集成（1965）
第５冊　平城宮木簡一　図版（1966）
解説（1969）
（平城宮発掘調査報告Ⅴ）
第６冊　仁和寺史料　寺誌編２（1968）
第７冊　唐招提寺史料第一（1971）
第８冊　平城宮木簡二 図版（1974）解説（1975）
（平城宮発掘調査報告Ⅷ）
第９冊　日本美術院彫刻等修理記録Ⅰ（1975）
第10冊　日本美術院彫刻等修理記録Ⅱ（1976）
第11冊　日本美術院彫刻等修理記録Ⅲ（1977）
第12冊　藤原宮木簡一　図版・解説（1978）
第13冊　日本美術院彫刻等修理記録Ⅳ（1978）
第14冊　日本美術院彫刻等修理記録Ⅴ（1979）
第15冊　東大寺文書目録第一巻（1979）
第16冊　日本美術院彫刻等修理記録Ⅵ（1979）
第17冊　平城宮木簡三　図版・解説（1981）
第18冊　藤原宮木簡二　図版・解説（1981）
第19冊　東大寺文書目録第二巻（1981）
第20冊　日本美術院彫刻等修理記録Ⅶ（1980）
第21冊　東大寺文書目録第三巻（1981）
第22冊　七大寺巡礼私記（1982）
第23冊　東大寺文書目録第四巻（1982）
第24冊　東大寺文書目録第五巻（1983）
第25冊　平城宮出土墨書土器集成Ⅰ（1983）
第26冊　東大寺文書目録第六巻（1984）
第27冊　木器集成図録―近畿古代編―（1985）
第28冊　平城宮木簡四　図版・解説（1986）

第29冊　興福寺典籍文書目録第1巻（1986）
第30冊　山内清男考古資料１（1988）
第31冊　平城宮出土墨書土器集成Ⅱ（1988）
第32冊　山内清男考古資料２（1989）
第33冊　山内清男考古資料３（1992）
第34冊　山内清男考古資料４（1992）
第35冊　山内清男考古資料５（1992）
第36冊　木器集成図録―近畿原始編―（1993）
第37冊　梵鐘実測図集成（上）（1993）
第38冊　梵鐘実測図集成（下）（1993）
第39冊　山内清男考古資料６（1993）
第40冊　山田寺出土建築部材集成（1995）
第41冊　平城京木簡一　図版・解説（1995）
第42冊　平城宮木簡五　図版・解説（1996）
第43冊　山内清男考古資料７（1996）
第44冊　興福寺典籍文書目録第２巻（1996）
第45冊　北浦定政関係資料（1997）
第46冊　山内清男考古資料８（1997）
第47冊　北魏洛陽永寧寺（1998）
第48冊　発掘庭園資料（1998）
第49冊　山内清男考古資料９（1998）
第50冊　山内清男考古資料10（1999）
第51冊　山内清男考古資料11（2000）
第52冊　地域文化財の保存修復　考え方と方法（2000）
第53冊　平城京木簡二　図版・解説（2001）
第54冊　山内清男考古資料12（2000）
第55冊　法隆寺古絵図集（2001）
第56冊　法隆寺考古資料（2002）
第57冊　日中古代都城図録（2002）
第58冊　山内清男考古資料13（2002）
第59冊　平城宮出土墨書土器集成Ⅲ（2003）
第60冊　平城京条坊総合地図（2003）
第61冊　鞏義黄冶唐三彩（2003）
第62冊　北浦定政関係資料
　　松の落ち葉一（2003）
第63冊　平城宮木簡六　図版・解説（2004）
第64冊　平城京出土古代官銭集成Ⅰ（2004）
第65冊　北浦定政関係資料
　　松の落ち葉二（2004）
第66冊　山内清男考古資料14（2004）
第67冊　興福寺典籍文書目録第３巻（2004）
第68冊　古代東アジアの金属製容器Ⅰ中国編（2004）
第69冊　平城京漆紙文書（一）（2005）
第70冊　山内清男考古資料15（2005）
第71冊　古代東アジアの金属製容器２　朝鮮・日本編
　　（2005）
第72冊　畿内産土師器集成西日本編（2005）
第73冊　黄冶唐三彩窯の考古新発見（2005）
第74冊　山内清男考古資料16（2006）
第75冊　平城京木簡三　二条大路木簡１（2006）
第76冊　評制下荷札木簡集成（2006）
第77冊　平城京出土陶硯集成Ⅰ（2006）
第78冊　黒草紙・新黒双紙（2007）
第79冊　飛鳥藤原京木簡一　図版・解説（2007）
第80冊　平城京出土陶硯集成二 平城京・寺院（2007）
第81冊　高松塚古墳壁画フォトマップ資料（2009）
第82冊　飛鳥藤原京木簡二 図版・解説（2009）
第83冊　興福寺典籍文書目録　第四巻（2009）
第84冊　山内清男考古資料17（2009）
第85冊　平城宮木簡七　図版・解説（2010）
第86冊　キトラ古墳壁画フォトマップ資料（2011）
第87冊　明治時代平城宮跡保存運動史料集（2011）
第88冊　藤原宮木簡三　図版・解説（2012）
第89冊　仁和寺史料　古文書編一（2013）
第90冊　大宮家文書調査報告書（2014）
第91冊　藤原宮木簡四　図版・解説（2019）
第92冊　木器集成図録―飛鳥藤原編Ⅰ―（2019）
第93冊　薬師寺文書目録第一巻（2019）
第94冊　仁和寺史料　古文書編二（2020）

奈良文化財研究所　研究報告

第１冊　文化的景観研究集会（第１回）報告書（2009）
第２冊　河南省鞏義市黄冶窯跡の発掘調査概要（2010）
第３冊　古代東アジアの造瓦技術（2010）
第４冊　古代官衙・集落研究会報告書「官衙と門」報告編／資料編（2010）
第５冊　文化的景観研究集会（第２回）報告書（2010）
第６冊　第14回古代官衙・集落研究会報告書「官衙・集落と鉄」（2011）
第７冊　文化的景観研究集会（第３回）報告書（2011）
第８冊　鞏義白河窯の考古新発見（2012）
第９冊　第15回古代官衙・集落研究会報告書「四面廂建物を考える」報告編／資料編（2012）
第10冊　文化的景観研究集会（第４回）報告書（2012）
第11冊　河南省鞏義市白河窯跡の発掘調査（2013）
第12冊　第16回古代・官衙・集落研究会報告書「塩の生産・流通と官衙・集落」（2013）
第13冊　文化的景観研究集会（第５回）報告書（2014）
第14冊　第17回古代官衙・集落研究会研究報告書「長舎と官衙の建物配置」報告編／資料編（2014）
第15冊　第18回古代官衙・集落研究会報告書「官衙・集落と土器１」（2015）

第16冊　キトラ古墳天文図　星座写真資料（2016）
第17冊　藤原宮跡出土馬の研究（2016）
第18冊　第19回古代官衙・集落研究会報告書「官衙・集落と土器２」（2016）
第19冊　第20回古代官衙・集落研究会報告書「郡庁域の空間構成」（2017）
第20冊　第21回古代官衙・集落研究会報告書「地方官衙政庁域の変遷と特質」報告編／資料編（2018）
第21冊　デジタル技術による文化財情報の記録と利活用（2019）
第22冊　カザフスタン後期旧石器文化の研究―ユーラシア考古学研究資料1―（2019）
第23冊　第22回古代官衙・集落研究会報告書「官衙・集落と大甕（2019）
第24冊　デジタル技術による文化財情報の記録と利活用2（2020）
第25冊　タジキスタン中期旧石器文化の研究―ユーラシア考古学研究資料2―（2020）
第26冊　第23回古代官衙・集落研究会報告書『灯明皿と官衙・集落・寺院』（2020）
第27冊　デジタル技術による文化財情報の記録と利活用―著作権・文化財動画・GIS・三次元データ・電子公開―（2021）
第28冊　文化財多言語化研究報告（2021）
第29冊　中央アジア初期後期旧石器文化の研究―ユーラシア考古学研究資料3―（2021）

奈良文化財研究所　基準資料

第１冊　瓦編１　解説（1974）
第２冊　瓦編２　解説（1975）
第３冊　瓦編３　解説（1976）
第４冊　瓦編４　解説（1977）
第５冊　瓦編５　解説（1977）
第６冊　瓦編６　解説（1979）
第７冊　瓦編７　解説（1980）
第８冊　瓦編８　解説（1981）
第９冊　瓦編９　解説（1984）

飛鳥資料館　図録

第１冊　飛鳥白鳳の在銘金銅仏（1976）
第２冊　飛鳥白鳳の在銘金銅仏　銘文編（1977）
第３冊　日本古代の墓誌（1977）
第４冊　日本古代の墓誌　銘文編（1978）
第５冊　古代の誕生仏（1978）
第６冊　飛鳥時代の古墳―高松塚とその周辺―（1979）
第７冊　日本古代の鴟尾（1980）
第８冊　山田寺展（1981）
第９冊　高松塚拾年（1982）
第10冊　渡来人の寺―桧隈寺と坂田寺―（1983）
第11冊　飛鳥の水時計（1983）
第12冊　小建築の世界―埴輪から瓦塔まで―（1984）
第13冊　藤原宮―半世紀にわたる調査と研究―（1984）
第14冊　日本と韓国の塑像（1985）
第15冊　飛鳥寺（1985）
第16冊　飛鳥の石造物（1986）
第17冊　萬葉乃衣食住（1987）
第18冊　壬申の乱（1987）
第19冊　古墳を科学する（1988）
第20冊　聖徳太子の世界（1988）
第21冊　仏舎利埋納（1989）
第22冊　法隆寺金堂壁画飛天（1989）
第23冊　日本書紀を掘る（1990）
第24冊　飛鳥時代の埋蔵文化財に関する一考察（1991）
第25冊　飛鳥の源流（1991）
第26冊　飛鳥の工房（1992）
第27冊　古代の形（1995）
第28冊　蘇我三代（1995）
第29冊　斉明紀（1996）
第30冊　遺跡を測る（1997）
第31冊　それからの飛鳥（1998）
第32冊　UTAMAKURA（1998）
第33冊　幻のおおでら―百済大寺（1998）
第34冊　鏡を作る　海獣葡萄鏡を中心として（1999）
第35冊　あすかの石造物（1999）
第36冊　飛鳥池遺跡（2000）
第37冊　遺跡を探る（2001）
第38冊　‘あすか―以前’（2002）
第39冊　A0の記憶（2002）
第40冊　古年輪（2003）
第41冊　飛鳥の湯屋（2004）
第42冊　古代の梵鐘（2004）
第43冊　飛鳥の奥津城―キトラ・カラト・マルコ・高松塚（2005）
第44冊　東アジアの古代苑池（2005）
第45冊　キトラ古墳と発掘された壁画たち（2005）
第46冊　キトラ古墳壁画四神玄武（2006）
第47冊　奇偉荘厳山田寺（2007）
第48冊　キトラ古墳壁画十二支―子・丑・寅―（2008）
第49冊　まぼろしの唐代精華―黄冶唐三彩窯の考古新発見―（2008）
第50冊　キトラ古墳壁画四神―青龍白虎―（2009）

第51冊　三燕文化の考古新発見
　　―北方騎馬民族のかがやき―（2009）
第52冊　キトラ古墳壁画四神（2010）
第53冊　木簡黎明
　　―飛鳥に集ういにしえの文字たち―（2010）
第54冊　星々と日月の考古学（2011）
第55冊　飛鳥遺珍―のこされた至宝たち―（2011）
第56冊　比羅夫がゆく
　　―飛鳥時代の武器・武具・いくさ―（2012）
第57冊　花開く都城文化（2012）
第58冊　飛鳥寺2013（2013）
第59冊　飛鳥・藤原京への道（2013）
第60冊　いにしえの匠たち
　　―ものづくりからみた飛鳥時代―（2014）
第61冊　はぎとり・きりとり・かたどり
　　―大地にきざまれた記憶―（2014）
第62冊　はじまりの御仏たち（2015）
第63冊　キトラ古墳と天の科学（2015）
第64冊　文化財を撮る―写真が遺す歴史（2016）
第65冊　祈りをこめた小塔（2016）
第66冊　早川和子が描く飛鳥むかしむかし（2017）
第67冊　藤原京を掘る―藤原京一等地の調査―（2017）
第68冊　高松塚古墳を掘る―解明された築造方法―（2017）
第69冊　あすかの原風景（2018）
第70冊　よみがえる飛鳥の工房―日韓の技術交流を探る―（2018）
第71冊　骨ものがたり―環境考古学研究室のお仕事―（2019）
第72冊　飛鳥―自然と人と―（2019）
第73冊　飛鳥の石造文化と石工（2020）

飛鳥資料館　カタログ

第１冊　仏教伝来飛鳥への道（1975）
第２冊　飛鳥の寺院遺跡１―最近の出土品―（1975）
第３冊　飛鳥の仏像（1978）
第４冊　桜井の仏像（1979）
第５冊　高取の仏像（1980）
第６冊　橿原の仏像（1981）
第７冊　飛鳥の王陵（1982）
第８冊　大官大寺 ―飛鳥最大の寺―（1985）
第９冊　高松塚の新研究（1992）
第10冊　飛鳥の一と―最近の調査から―（1994）
第11冊　山田寺（1997）
第12冊　山田寺東回廊再現（1997）
第13冊　飛鳥のイメージ（2001）
第14冊　古墳を飾る（2005）
第15冊　うずもれた古文書
　　―みやこの漆紙文書の世界―（2006）
第16冊　飛鳥の金工海獣葡萄鏡の諸相（2006）
第17冊　飛鳥の考古学2006（2007）
第18冊　「とき」を撮す―発掘調査と写真―（2007）
第19冊　飛鳥の考古学2007（2008）
第20冊　飛鳥の考古学2008（2009）
第21冊　飛鳥の考古学2009（2010）
第22冊　小さな石器の大きな物語（2010）
第24冊　木簡黎明
　　―飛鳥に集ういにしえの文字たち―（2010）
第24冊　飛鳥の考古学2010（2011）
第25冊　鋳造技術の考古学
　　―東アジアにひろがる鋳物師のわざ―（2011）
第26冊　飛鳥の考古学2011（2012）
第27冊　飛鳥の考古学2012（2013）
第28冊　飛鳥・藤原京を考古科学する（2013）
第29冊　キトラ古墳壁画発見30周年記念　白虎　玄武　朱雀　青龍（2014）
第30冊　飛鳥の考古学2013（2014）
第31冊　大和の美仏に魅せられて（2014）
第32冊　飛鳥の考古学2014（2015）
第33冊　飛鳥の考古学2015（2016）
第34冊　飛鳥の考古学2017（2018）
第35冊　飛鳥の考古学2018（2019）
第36冊　飛鳥の考古学2019（2020）
第37冊　飛鳥の考古学2020（2021）

その他の刊行物（2020年度）

・奈良文化財研究所紀要2020
・奈文研ニュースNo.77～80
・埋文ニュースNo.182～185
・奈文研論叢第２号
・『全国遺跡地図総目録』
・『平城宮跡資料館ミニ展示「古代のいのり―疫病退散！」』
・『奈良の都の暮らしぶり～平城京の生活誌～奈良文化財研究所第12回東京講演会講演録』
・『地下の正倉院展―重要文化財 長屋王家木簡―』
・『Археология окружающей среды во время проведения полевых работ（карманная версия）』
・『On site environmental archaeology（mobile version）』
・『古代集落の構造と変遷』（古代集落を考える１）第24回古代官衙・集落研究集会研究報告資料

・『西トップ遺跡調査修復プロジェクト カンボジアアンコール遺跡群』
・『一本づくり・一枚づくりの展開２（西日本編）Ⅰ報告編 古代瓦研究10』
・『一本づくり・一枚づくりの展開２（西日本編）Ⅱ資料編 古代瓦研究10』
・『木簡リーフレット 英語版・中国語繁体字版・中国語簡体字版・韓国語版』
・『探検！奈文研』
・『鬼神乱舞―護る・祓う・鬼瓦の世界―平城宮跡歴史公園第一次大極殿院南門復原整備工事記念特別展リーフレット』
・『歴史的脈絡に因む遺跡の活用―儀式・行事の再現と地域間交流の再構築―令和２年度 遺跡整備・活用研究集会報告書』
・『西トップ遺跡調査修復 中間報告10 中央祠堂基壇部再構築編』
・『岸良鉄英氏寄贈東南アジア陶磁器整理報告２ クメール陶器編』

『奈良の都の暮らしぶり～平城京の生活史～
奈良文化財研究所第１２回東京講演会講演録』

『全国遺跡地図総目録』

『探検！奈文研』

予算等

予算（予定額）

単位：千円

	2020年度	2021年度（予算額）
文部科学省からの運営費交付金（人件費を除く）	766,469	735,179
施設整備費	0	0
自己収入（入場料等）	52,143	48,616
計	818,612	783,795

土地と建物

単位：㎡

	土　地	建 物（建面積／延面積）	建築年
本庁舎地区	8,878.94	2,812.45/11,387.06	2018年
平城宮跡地区	※	10,630.53/16,149.67	1970年他
藤原地区	20,515.03	6,016.41/9,477.43	1988年他
飛鳥地区	17,092.93	2,657.30/4,403.50	1974年他

※平城宮跡地区の土地は文化庁所属の国有地を無償使用

科学研究費助成事業（2021年4月9日現在）

単位：千円

研究種目	（参考）2020年度				（参考）2021年度			
	①科学研究費補助金		②学術研究助成基金助成金		①科学研究費補助金		②学術研究助成基金助成金	
	件　数	金　額	件　数	金　額	件　数	金　額	件　数	金　額
基盤研究（S）	1	25,090	−	−	1	27,040	−	−
基盤研究（A）	2	25,740	−	−	3	27,560	−	−
基盤研究（B）	13	48,060	−	−	16	53,040	−	−
基盤研究（C）	−	−	18	14,885	−	−	13	12,090
国際共同研究加速基金(国際共同研究強化(B))			1	3,640			1	3,640
挑戦的研究（開拓）	−	−	2	6,630	−	−	2	7,670
挑戦的研究（萌芽）	−	−	1	2,990	−	−	−	−
若手研究（A）	1	2,600	−	−	−	−	−	−
若手研究（B）	−	−	6	650	−	−	2	−
若手研究	−	−	16	18,590	−	−	20	18,980
研究活動スタート支援	−	−	2	1,300	−	−	1	650
学術変革領域研究（A）計画研究	1	17,550	−	−	1	17,160	−	−
新学術領域研究（研究領域提案型）公募研究	2	4,810	−	−	1	1,170	−	−
研究成果公開促進費（データベース）	1	1,900	−	−	1	1,800	−	−
研究成果公開促進費（研究成果公開発表B）（ひらめき☆ときめきサイエンス～ようこそ大学の研究室へ～KAKENHI）	1	490	−	−	1	490	−	−
特別研究員奨励費	1	780			1	780		
計	23	127,020	46	48,685	25	129,040	39	43,030

受託調査研究

単位：千円

区　分	2019年度		2020年度	
	件　数	金　額	件　数	金　額
研　究	39	269,587	18	240,645
発　掘	13	54,818	12	22,461
計	52	324,405	30	263,106

研究助成金

単位：千円

研究助成金	2019年度		2020年度	
	件　数	金　額	件　数	金　額
	14	22,806	4	7,672

※採択年による集計
※二ヵ年にわたる場合は初年度に計上

客員研究員一覧

令和3年度4月1日現在

令和3年度客員研究員名簿

所　　属	氏　　名
企画調整部（企画調整室）	羽　生　淳　子
企画調整部（文化財情報研究室）	小　林　謙　一
企画調整部（国際遺跡研究室）	Shaun Ian Mackey
〃	杉　山　　洋
〃	森　本　　晋
文化遺産部（建造物研究室）	林　　良　彦
文化遺産部（歴史研究室）	綾　村　　宏
〃	山　田　　徹
文化遺産部（遺跡整備研究室）	小　野　健　吉
〃	Emmanuel MARES
都城発掘調査部　（平城地区考古第一研究室）	岩　永　省　三
〃	中　野　祥　子
〃	難　波　洋　三
都城発掘調査部（平城地区考古第二研究室）	青　木　　敬
〃	深　澤　芳　樹
都城発掘調査部　（平城地区史料研究室）	黒　田　洋　子
〃	杉　本　一　樹
〃	舘　野　和　己
〃	方　　国　花
〃	渡　邉　晃　宏
都城発掘調査部（飛鳥・藤原地区考古第一研究室）	諫　早　直　人
〃	上　原　眞　人
〃	松　村　恵　司
都城発掘調査部（飛鳥・藤原地区考古第二研究室）	巽　　淳一郎
〃	松　本　啓　子
都城発掘調査部（飛鳥・藤原地区史料研究室）	竹　内　　亮
〃	藤　間　温　子
埋蔵文化財センター（保存修復科学研究室）	青　木　政　幸
〃	大　賀　克　彦
〃	荻　山　琴　美
〃	小　椋　大　輔
〃	北　田　正　弘
〃	金　　旻　貞
〃	肥　塚　隆　保
〃	澤　田　正　昭
〃	杉　岡　奈穂子
〃	辻　本　與志一
〃	中　村　力　也
〃	浜　田　拓　志
〃	福　永　　香
〃	三　村　　衛
〃	村　上　　隆
〃	吉　田　万　智
埋蔵文化財センター（環境考古学研究室）	上　中　央　子
〃	大　江　文　雄
〃	菊　地　大　樹
〃	茂　原　信　生
〃	中　橋　孝　博
〃	松　崎　哲　也
〃	丸　山　真　史
埋蔵文化財センター（年代学研究室）	伊　東　隆　夫
〃	児　島　大　輔
〃	光　谷　拓　実
埋蔵文化財センター（遺跡・調査技術研究室）	小　澤　　毅
〃	岸　田　　徹
〃	狭　川　真　一
〃	髙　野　紗奈江
〃	中　村　亜希子
〃	西　口　和　彦
〃	西　山　昭　仁
〃	野　口　　淳
〃	平　川　ひろみ